岩室家文書「広島開基」参考資料（31・4・8）8

安政二年「村上家乗」参考資料（31・4・8）1

① 将軍秀忠との面会

御家譜ニ曰ク

（前略）

将軍秀忠公ヘ御目見ヘ、其ノ時ハ上田ヲ先ニ召シ出サレテ、イカニ主水、久敷ク逢ハザルナリ。茶ノ湯ノ業ハナント仕リタルヤ。扨、此ノ度ノ功ハ其ノ方ニハメヅラシカラズ思シ召ス旨上意ナリ。其ノ次ニ亀田ヲ召シ出サレ、一番鎗一番首ノ御誉メアリテ、其ノ外三人モ段々召シ出サレ黄金及ビ御腰物ヲ賜フ。コヽニヲイテ御料理下サルベキノ処、御当用コレアルニヨリテ尾張中将殿エ仰セ付ケ置カル、ノ間彼ノ方ヘ罷リ越スベキノ旨仰セ出サレ、スナハチ義直卿ノ営ニヲイテ各御料理頂戴スルナリ。亀田ノ家記ニ曰ク、亀田事ハ当代ニヲイテ両度大功ヲ顕ハスモノユヘ

但馬ノ守家士ト存ズベカラズ、天下ノ人ト思フベキ旨

東照宮ノ玉イテ、兼常ノ御刀コレヲ下サル。マタ

将軍秀忠公ハ保昌五郎ノ恩脇差ヲ賜フ。其ノ時ノ勇士録ニ曰ク、当時武道ノ達人ハ亀田大隅ト溝口半左衛門ガ嫡子ナリト誌ス。［此ノ溝口ハ柴田修理ノ大夫勝家ノ勇士ニシテ北ノ庄籠城ノ内ノ十五人ノ稀ナルモノナリ］カクノゴトク誉レアルモノ他家ニイヅル故ハ、上田宗固ノ嫡備前ト縁談ノ出入リアリテ、速ヤカニ浅野家ヲ立チ退クトイヘドモ、長晟ヨリ仕途ノ障ナフシテホドナク加賀肥前ノ守利常ヘ本知ニシテアリツクナリ。最初ハ亀田権兵衛ト号シ浅野家ニシテ五百石ヲ給リ、長政・幸長・長晟三代ノ間武辺ノ功アルユヘ度々加恩ヲ賜フテツイニ俸禄一万石ニ至ル。又、上田宗固ハ、初メハ太閤

② 大坂夏の陣後の上田宗箇退去

宗箇翁伝　　調子勝成撰

（前略）

両大君之ヲ感ズ。乃チ黄金・暑衣・道服ヲ其ノ使ヒニ　賜フ。此ノ役、亀田モ亦戦功有リ。亀田、長晟公ニ謂ヒテ曰ク、今日ノ戦、上田ガ勇功鬼ノ如キト謂フベシ。爾後或イハ曰フ、我、一番槍ナリト。翁之ヲ聞キテ之ヲ面責ス。大坂城敗レテ

台旗京師ニ凱旋ス。長晟公、功ヲ以テ従四位ノ下ニ叙ス。翁モ亦両大君ニ謁見ス。辱ク其ノ戦功ヲ賞セラル。又

台命ニ依リテ主水ノ正ニ復ス。長晟公紀州ニ帰リ、樫井ノ戦功ノ臣ヲ召シテ相見ヲ許ス。翁、請ヒテ曰ク、我ガ臣僕、樫井ノ戦、一番ニ槍ヲ交ユ。若シ詞命ヲ加ヘバ則チ感戴余リ有ラント。公ノ曰ク、其ノ望ミヲ塞グベケント雖モ、傍臣、汝ノ請ヒノ如キ者少シト為サズ。我独リ汝ニ私セズ。汝之ヲ言フ勿レ。翁可カズ。頭ヲ掉リテ去ル。泉ノ堺ニ在リ。公、大イニ怒リ、武城ニ往キテ幕下ニ之ヲ訴ヘント欲ス。自ラ之ニ矢フテ曰ク、其ノ裁断ヲ得ザレバ、則チ再ビ紀城ニ還ラズ。翁モ亦、公ニ先ンジテ武城ニ到リ、自ラ旅装ヲ着テ城門ノ傍ラニ立ツ。藤堂高虎、土井利勝ノ　営ニ登ルニ遇フ。之ニ訴ヘテ曰ク、小臣、長晟ノ為ニ喜ビレズ。故ニ紀州ヲ退キテ此ニ到ル。乃チ訴状、槍場ノ図ヲ捧ゲテ、伏シテ冀クバ一覧ヲ枉ゲバ幸ヒタラント。利勝曰ク、今方ニ中途、他日ヲ期スベシ。少クアリテ酒井忠世ノ至ルニ遇フ。翁、言フコト初メノ如シ。忠世曰ク、翁、私舎ニ帰レ。明日使介ヲ以テ審サニ其ノ旨ヲ聞カン。明ル日使至ル。翁、状ヲ献ズ。竟ニ

台聴ニ達ス。辱ク

台命有リテ曰ク、翁ノ事、素ヨリ知ル所ナリ。此ノ図、訴状何ノ疑アランヤ。乃チ

（後略）

命諭有リテ翁ヲシテ紀州ニ帰ラ使ム。長晟公怒リ解ケテ能ク之ヲ遇スルコト初メノ如シ。翁、浪士タル時、侯伯幣ヲ以テ之ヲ徴ス。未

（後略）

①・②『上田家文書調査報告書　上田家家政史料集成』（二〇〇五年　広島市教育委員会発行）

③

かねつね【兼常】　美濃における末関の代表工。濃州関には古刀期だけでも、兼常と名乗るものが数名いる。そのうちもっとも有名なのは、手棒兼常である。これの時代については、初代とする説40、福三郎兼常とする説744、文明（一四六九）ごろとする説40などがある。初代ならば応永（一三九四）か23、正長（一四二八）ごろ50、福三郎ならば嘉吉（一四四一）ごろ744の兼常ということになる。

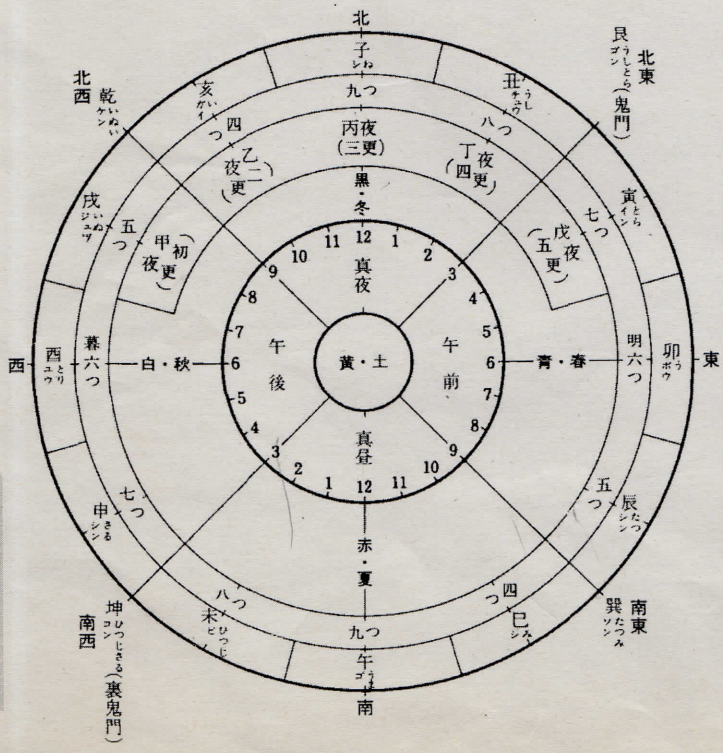
手棒、つまり手を失った不具者となった原因については、師匠が湯加減を秘密にしているのを、無理に探ったので、師匠が怒って手棒にした、とも40、父兼音が修業のことで怒り、鉄槌で手を叩いたため、手がなえてしまった、ともいう573。しかし、その後、苦心して片手で立派に鍛え上げたばかりか、希代の切れ物だったので、世上では〝手棒兼常〟とよんで、珍重した。なるほど、「兼常　黒弥七郎依物切進上吾西加右（衛）門」と在銘の刀がある39〔挿画〕。

織田信長が元亀二年（一五七一）七月、兼常助右衛門に与えた朱印状が、子孫の家に現存する〔口絵33〕。冒頭に「当所鍛冶職　前々ノ如ク為ル可シ」とあるから、当時兼常が関の鍛冶頭だったのであろう。兼常の刀は中国にも輸出されていたとみえ、中国の『武備志』にまで、「兼常ト号スル者、最モ嘉ナリ」と称揚されている〔口絵35〕。

作風＝一般の末関物と同様で、五の目乱れを好んでやくが、直刃も見受ける。

福永酔剣『日本刀大百科事典』（雄山閣出版）

④　方位・時刻表



『角川日本史辞典』

⑤ **じょうーこく** ジャウ：【上刻】『名』一時（いっとき＝二時間）を三分したその初めの時刻。中刻・下刻に対していう。＊浄瑠璃・丹波与作待夜の小室節＝上「こくげんは巳（み）の上こくとの定にて」＊浄瑠璃・曽我会稽山＝三「日あしもはやき馬ひつじ、我身の運も上刻と、八卦占かた八つひびく」＊護持院原の敵討〈森鷗外〉「見分の役人は戌（いぬ）の上刻（ジャウコク）に引き上げた」 発音ジョーコク〈標ア〉〔0〕

⑥ **みーいわい** ：いはい【身祝】『名』その人の一身上の祝い。年まわりや、結婚など、その人個人や家族だけの祝い。＊俳諧・鷹筑波＝三「何のかのとみいはひするや今朝の春〈利正〉」＊浄瑠璃・夕霧阿波鳴渡＝上「身いはひと申しどっというた餅つき」 方言①厄年の者が二月と六月とに宴を催すこと。愛媛県温泉郡神和044 ②両親のある者が盆の一四日に魚を食うこと。香川県三豊郡五郷044 ③家族の生まれ年の干支（えと）と正月一二日までの日の干支と合った日に焼餅や頭付の魚などを膳につけて祝うこと。京都府竹野郡網野626 ④家族の数だけ飾って四日に食べる正月の小形のお供え餅。伊豆八丈島中之郷312 ⑤正月一六日。伊豆利島306 発音〈標ア〉〔イ〕、〈京ア〉〔イ〕、

⑦ **ようたしーちょうにん** ：チャウニン【用達町人】『名』認可を得て、宮中、幕府、諸大名などに用品を納入する町人。＊地方凡例録＝七「江戸町人帯刀の儀〈略〉御用達共町人等古来はたい刀致も有、之たる処〈略〉御用達一統町人たい刀御廃止＝被仰出＝たり」＊滑稽本・人心覗機関＝二・中「屋敷へ出入用達町人（ヨウタシチャウニン）の家へ立寄り」 発音ヨータシチョーニン〈標ア〉〔チョ〕

⑧ **ようたしーどころ** 【用達所】『名』用を済ませる所。用たしをする所。＊滑稽本・東海道中膝栗毛＝五・追加「両側家ごとに御師の名を板にかきつけ、用立（ヨウタシ）所といへる看板竹葦のごとく」 発音ヨータシドコロ〈標ア〉〔ド〕

⑨ **ようたしーば** 【用達場】『名』江戸時代、代官所その他の諸役所で役人が執務する建物、または部屋。＊禁令考＝前集・第四・巻三五・享保一〇年五月「新規御代官并類焼之節御用達場公事場手代長屋等入用積り拝借書付〈略〉一手代御用達場 拾坪」

⑩ **ようたしーやく** 【用達役】『名』江戸時代、武家や寺社で必要な品物を買い調える役。＊禁令考＝前集・第五・巻四一・安政五年一二月「普化宗に取締料抔と唱勧物一時に請取候儀鈴法寺相尋候答書〈略〉一用達役と唱候儀は、俗人に而其寺家事に御座候而、武家方に而用人、或は給人同様之儀に御座候」

⑪ **ろうーじょ** ラウヂョ【老女】一『名』①年とった女。老婆。老婦。＊米沢本沙石集＝八・四「家内に老女あり」＊浮世草子・日本永代蔵＝一・三「こぼれすたれる筒落米をはき集て、其日を暮せる老女（ラウヂョ）有けるが」＊古楽府＝捉搦歌「男子千凶飽＝人手、老女不、嫁只生、口」 ②令制で、六一歳から六五歳までの女子。年齢は天平宝字二年（七五八）の勅で六〇歳から六四歳に引き下げられた。＊正倉院文書＝養老五年・下総国葛飾郡大嶋郷戸籍（寧楽遺文）「孔王刀良売、年陸拾壱歳、老女神母」＊正倉院文書＝陸奥国戸籍（寧楽遺文）「戸主姑古奈、年六十三、老女」 ③武家の奥向きで、侍女の長である婦人。＊談義本・根無草＝後・四「しっぽりのぬれ事には、女中の上気耳を熱がり、老女も昔に還らまほしと思ふ」＊合巻・色三味線艶連引＝前「此処は奥の事何事によらず、老女（ラウヂョ）が知らいでは済みませぬ」 ④能面の一つ。年老いた女の面。「関寺小町（せきでらこまち）」「卒都婆小町（そとばこまち）」などに用いる。 二歌舞伎所作事。長唄。

⑫ **しっーそう** ：サウ【湿瘡】『名』皮膚病。疥癬（かいせん）虫の寄生によって皮膚に湿疹（しっしん）を発し、全身に広がってかゆみを起こさせるもの。かいせん。しつ。＊随筆・耳袋＝一「近き頃何とかいへる狂歌人湿瘡を煩らひける」 発音シッソー〈標ア〉〔0〕

⑤〜⑫『日本国語大辞典』（小学館）

⑬ 東城浅野家と上田家・三原浅野家との縁戚関係（ゴシックは文久元年末の生存者）

高謙院（錦小路頼理女）

浅野高平（実父は浅野長喬、孫左衛門、たかひら）

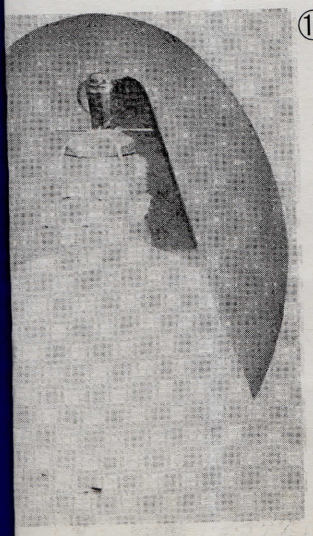
道博（実父は堀田正穀、高博、）

蓮月院

道積（出衛、建仁院）

愛姫

⑭



②66歳 ③広島藩家老 1万石

⑯

信濃（慶徳院）

隆玄院（奥田氏）

上田安節

忠姫（御宇衛様）

安敦（上田主水）

亀之助

辰之進

駿河（居防、澄源院）

寛姫（高辻福長女、麗照院）

道興（大炊、豊後）

芝山国典

久姫（芝山国豊二女）

浅野忠敬（三原浅野家、出羽、大義院）

忠助（遠江）

忠英（右近）

御役人（寛政十年）【「村上家乗」巻二十二　寛政十年春】

御家司　辻　並次

御用人　吉田与一右衛門　御目付　長束貞弐　御蔵奉行　知行格　山田弥兵衛

八木半兵衛　星野文右衛門　米原直右衛門

千賀喜四郎　長　宗次郎

宮崎本蔵　谷口惣助

御出頭　石田喜兵衛　吟味役　三宅弥太福永酔剣『日本刀大百科事典』（雄山閣出版）　御銀奉行　友野徳次郎

真野又五郎　土屋藤右　長束甚左衛門

永井左次馬　副役也

御用達　伊藤小右衛門　御蔵奉行之上也　御代官　土屋藤右衛門

相庭源右衛門　山県与一郎

堀尾五郎八

御勘定奉行　村上勇蔵　御船奉行　室角五兵衛

以上知行　割奉行兼

吟味役之上也　御武具奉行　土屋平太　御作事奉行　谷口正兵衛

以上肩衣組　大崎貞助

八木丈助

是を御目付格と云

古名之由也

御船奉行・割奉行ハ必す此格ニ□候例ニハ非す、御武具奉行も今

御小姓、打込衆此格也、［　］も副役ハ必例ニハ非す、今如此也

御台所奉行

賄所奉行兼　渡辺勘右衛門

田宮源五

御右筆　野原八右衛門

山県清蔵

日記方兼

御用所詰　山県与一馬

中根弥平次

以上御小姓組

御勘定所詰御徒士

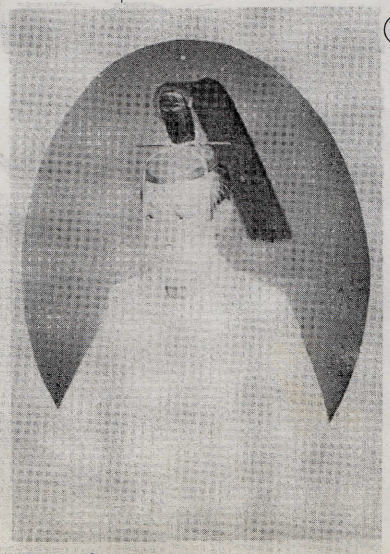
桂　直蔵

御作事所詰同

矢野武助

⑭⑮刑部芳則編『明治をつくった人びと　宮内庁三の丸尚蔵館所蔵写真』（吉川弘文館）

⑮



浅野　忠

①少教正　②64歳　③広島藩家老　3万石

浅野道興

①権少教正

№2

⑰ 嘉永の大倹令中の市況と嘉永の大洪水、三年間の格外省略

嘉永二年の正月は大倹中なるに依り、御家老以下諸士ともに年頭の互禮を廢止し、御家老の門前は、表門以外には門松を立てず、御年寄以下は、門飾りを廢し、門松を立てず、代ゆるに差松のみを以てし、町家一般には門松を立てず、唯正月の輪飾りのみを懸けて、年頭の印となし、年始の互禮を廢止し、町御奉行所の嘉日祝賀も一切停止せられたれば、市中寂寞、殊に曉來雨降り、街路の行客極めて稀なりしと云ふ、二月七日は初午に當り、城内三之御丸稲荷社にて、例祭だけは行はれたれど、大倹中につき、御家中幷に町新開の者どもの拜禮を停止し、四月五日には、諸侯幷に幕吏の送迎、其他領外出張の節たりとも、藩士の着服は一切綿服に限るべしと令し、閏四月には、大倹中は夏年頭の賀禮を廢し、藩主歸國祝賀の惣登城出仕を止め、又五節句の外は毎月朔望・二十八日の賀禮を廢し、二・四・六・十・十一・十二月のみ、朔日賀禮を行ふべき旨を令し、六月には例年の國主祭を全廢し、十二月には、明年より御城内の年頭松飾幷に節分の柊挿方を省略し、年頭の御鐵砲放初式、御弓射初式を廢止し、御馬乘初式も八丁馬場に於て行ふことを止め、略式に依り、城中御對面所前の馬場に於て行はるべき旨を令せり、然るに嘉永三年六月には大洪水あり（大洪水のことは、本第九節嘉永三年の大洪水の條下に詳述す）寛政八年以來未曾有の大災害と稱する程なれば、其復舊工事は莫大にして、被難民の救恤も容易の事にあらず、藩主は諸社寺に命じて、「天氣快晴・氣候順行・諸作豐熟・萬民安全の祈禱」を行はしめ、町御奉行所に於ては、廣島五組の用意米を殘らず買上げ、以て遭難窮民の救恤に宛てしも、窮民の員數甚だ多く、容易に救濟し難きが故に、七月には自家住・借屋住の差別なく、一戸につき舊銀札六百目づゝを貸與し、以て生業の資を助け、又東西宿

⑱ 一六二 家士の年中行事及び江戸出帰りに省略を申渡す条々

浅野図書館・植木家「諸触扣帖」（天保十四）

当御省略中作略廉中値頭書

一年頭掛餅等相止門前計差松之事

一年頭勤御家老中初相止候事

但し、格別之近親江追而平服相越候義ハ銘々存寄次第之事

一年頭ニ付使者使等遣候義も相止候事

一歳暮勤相断候事

一五節句之勤相断候事

一暑寒見舞御家老中初罷越候義相止候事

右之廉々幷朔・望・廿八日等拙者江御入来之義相断候事

一水火出張尚亦供連相減候事

一火事見廻使等遣候義極近隣之外相止候事

一音信等弥以相断候事

一客来饗応向ハ一切相止、寄合事等弥以極手軽ニいたし候事

一男女人減等ハ銘々家内之多少も有之勝手次第事

一格別之用事相頼候輩江者、相当之謝礼いたし一通り之分、其外歳末等ニ当り候分ハ一切相止、先方々聊之品たり共受納一切相断候事

一朔・望・廿八日祝詞入来之義兼而相断候処、此場合年頭・歳末・五節句祝詞・暑寒之見舞入来も相断候事

本文之趣無急度及噂置呉候様御年寄中々頼来候事

一同御役中江戸出帰之節、附使者相止候事

一同御役中出定ニ付、暇乞ニハ互ニ罷越、尤手附熨斗・茶・多葉粉盆計差出事

驛百匹の馬持ちどもには、大豆十石・糠二十石を救與して、馬糧に宛てしめたるに、七月十一日九州中國筋大風害あり、尋で八月七日封内大風雨あり、是を以て十一月五日藩府は令を發して、『去る申年（嘉永元年）以來、三箇年間格外嚴敷儉約諸事省略の令を布き、本年に至り其期に滿つるも、其間引續き不慮の變災これあり、彼是莫大の費用輻輳せるを以て、尚又明年より三箇年間、祭祀に關することは之を復舊するも、其他の諸事は一切從前の通り、萬端格外御取縮あるべし』と申渡しぬ、嘉永四年の春に至り、米價空前の騰貴を爲し、殆んど平年の二倍半に達したれば、市況銷沈し、下民困窮せるもの甚多し、是を以て窮民に救助米を給與して、京橋川下流の毛保（蘆洲の地）を開拓し、新田を築き、又婦女小兒には「よもぎ」を摘採りて綿座役所に持參せしめ、「よもぎ」百目につき、麥一合の割合にて之を買上げ、以て生活の費を助けしめたり、

『広島市史』第三巻（大正十二年）

⑲

奏者 そうしゃ

「そうじゃ」ともいう。室町・安土桃山時代の職名の一つ。室町幕府や諸大名家に置かれ、幕府の場合正式には申次あるいは*申次衆と呼ばれた。数名で結番して、殿中に伺候してきた諸士の姓名を告げ、謁せしめるのがその職掌である。関係史料として「長禄二年以来申次記」「殿中申次記」などがある。織田家や豊臣家の職制上にも奏者が存在した。⇩奏者番　伊藤喜良

⑳

奏者番 そうしゃばん

江戸幕府の職制。「そうじゃばん」とも言う。君側にあって諸事を取り次ぐ人、またその役を*奏者と言い、室町幕府では*申次衆のことを言った。織田氏、豊臣氏、開幕以前の徳川氏も奏者の役を置いた。江戸幕府における初任は、一六〇三年（慶長八）徳川家康に召され、室町幕府の礼法を伝えた本郷信富と言われる。「当代記」によると〇八年ごろ、永井直勝、石川忠総、遠山利景、西尾忠永、城昌茂らが奏者番として諸方よりの献上物を披露している。その後しだいに制度化され、万石以上より二〇―三〇人を任命。当番、助番、添、非番の別があり、かわるがわる務めた。任務は年始・五節供等に将軍に謁見する大名等の姓名を披露すること、献上品・下賜品の受渡し、殿中で元服する大名に作法を指導すること、三家・大名家への上使等であった。また*寺社奉行は一六五八年（万治元）以降奏者番より兼帯する例となった。一八六二年（文久二）に至りいったん廃止されたが、翌年旧に復した。　松尾美恵子

⑲⑳『日本史大事典』（平凡社）

参　松平太郎『江戸時代制度の研究』武家制度研究会、一九一九年、（校訂）柏書房、一九六四年。

一同御役中帰着ニ付、当日為歓罷越候義者相止候事
　但、翌日ゟ為歓罷越候義者銘々勝手次第、尤手附熨斗・茶・多葉粉盆計差出候事
一出足前夕酒肴差出候義一切相止、手附のし計之事
一出足当日見立ニ相見候義一統相断、格別之近親相見候ハヽ、吸物・はまくり・焼肴一種迄之事
一帰着当日待受相見候義一統相断、其内近親相見候ハヽ、酒肴ハ出足之節之通り候事
一音信贈答一切断ニ候へ共、親子程ハ手軽ニ取遣り不苦候事
　但、家内之親子も同断
一吉凶共知せ続柄之外知音之方角江ハ知せ相止候事
一江戸往来其外ニ而も門前通行有之節、御家老中初同御役中其外掃除計ニ而、番田子人等差出候義相止候事
　但、近類ハ格別之事
一年回ニ付親子・兄第・祖父母・伯叔父母迄内仏江之備物致其余ハ相止候事
　但、家内ニ而も右続柄ハ同断、并其仁之置方ハ格別之事
〔十二月〕

『広島県史』近世資料編Ⅳ（昭和五十年）

㉑

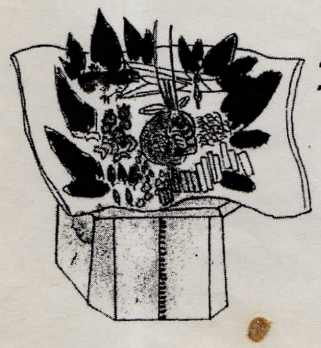


図470　「蓬莱」（料理調法集・年中嘉祝之飾）

№3

㉒ **若水の事**【わかみずのこと】 若水。〔年中重宝記・一〕に元朝の未明に、井戸の一番水を汲んで飲むと年中の邪気を除くという。この水は年男が汲む。年男は唐では方相氏といい、禁裏では主水司が汲んで天子に奉る。〔重宝記・宝永元序刊〕は元朝未明にその年の恵方から汲む水を若水と名付る。水は万化の源、諸生の始めとし、諸の食物は水でなければ調え難く、慎んで汲み上げる。〔料理調法集・年中嘉祝之飾〕は、○「若水」は寅の刻（四時）に生気の水を汲んで、瓶又は桶に入れ、銀器で奉る。御手洗 御櫛の水にも同じく奉る。○「若水御手洗初」は、初手洗の御盤は年男より奉るのが法であるが、家の習いによる。仕立て様は新しい盤に裏白 杠葉 根松 南天 青石七ツを盤の底に敷き、お湯は湯桶に入れて玉女の方に向い、御手水を参らす。

㉓ **大服**【おおぶく】 〔年中重宝記・一〕に大服は、元日の朝 若水で茶を煮て飲むことをいう。寿を祝し、また服と福の音が通じる大福の意による。梅干を入れるのは、梅は春に縁があり、また茶の熱いのをうめるという縁をとったものである。

㉔ **屠蘇酒**【とそしゅ】 〔昼夜重宝記・安永七〕に『相伝』に曰くとして、屠蘇白散を正月元日に一人が呑むと一家は無病、一家が呑むと一里無病、若い頃から呑むと老いても無病、命が長い。また玄治が曰くとして、諸説が多く、屠は鬼気を去り 蘇は神気を生ずる、この義が最もよいという。○屠蘇は、玄朔より玄治法印へ御相伝の正方である。白朮・桔梗・川椒（各三分）、肉桂（一分）・大黄（一分、今はこれを去る）を細末（粉）にして紅絹の袋に入れる。〔料理調法集・年中嘉祝之飾〕には、屠蘇は医師が奉り、役人が受け取る。屠蘇は紅の袋に入れ柳の枝につけ、歳暮五ツ時（夜十時）生気の方の井の内水面より一尺程おいて吊り置き、元旦寅の刻（朝四時）に取り上げ、御銚子の酒に浸して置く。三ツ土器を出し、上の土器で屠蘇三献、次の盃で屠（度）障散三献、次の土器で白散三献

㉕ **書初の事**【かきぞめのこと】 新年に初めて字を書く行事。「立春書初」（〔万代重宝記〕等）、「試筆」（〔開化実益現今児童重宝記〕等）、「吉書初」（〔筆海重宝記〕等）ともある。「七夕」の詩歌とともに行われた。〔料理調法集・年中嘉祝之部〕に「吉書始」は、新しい書筴 又は小折敷に書院硯を据え、文鎮・筆架・硯塀を取り揃え、水入には若松に裏白を挿し、墨は目出度い絵様の墨を用い、筆は白軸、紙は檀紙を近習の人が沙汰する。〔書初之詩歌範例〕〔麗玉百人一首吾妻錦〕に「佳辰令月歓無極」「万歳千秋楽未央」「君が代は千代にやちよにさゞれいしのいはほとなりてこけのむすまで」等。

㉖ **歯固**【はがため】 〔年中重宝記・一〕に歯固とは、正月元日に鏡餅に向うこととあり、歯の固いのは若やぐ心である。唐土でも元日に膠牙餳を食うことがあり、膠固の意で、日本の歯固と同意とある。〔重宝記永代鏡〕に正月の鏡餅を食する祝言をいう。歯は齢と同じで、正月三日の内 吉日を選んで鏡餅を食し、歯を固め、齢を延べる。殿上方の行いであるが、平人でも祝い寿くべきとする。〔日用重宝記〕に歯固めは、食い初めに用いるとする。〔料理調法集・年中嘉祝之飾〕に「御居歯固」は菱二枚赤白。年始の鏡餅である。上飾は橙 伊勢海老 穂俵 野老 蜜柑 薮柑子 栢 搗栗（紙包）串柿 熨斗昆布（紙包）根松 薮柑子（花包）裏白 杜葉（改め敷）。

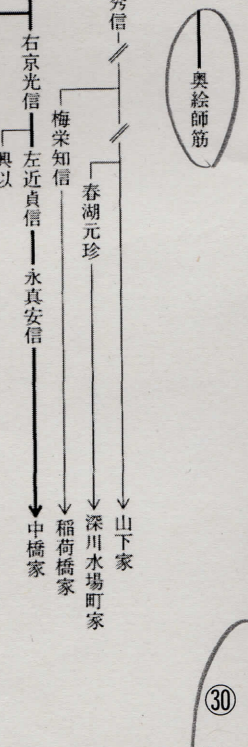
㉗ **蓬莱**【ほうらい】 〔年中重宝記・一〕に「元日飾り物」として、三方に栗 榧 蜜柑 柑子 伊勢海老などを積み重ねて賞する。来客にも勧める。蓬莱山は仙人の住む嶋なので 寿を祝してこの三方を蓬莱という。唐では春盤といい、年始にこれを嘗める。〔料理調法集・年中嘉祝之飾〕に蓬莱は、公卿（供饗衝重）に敷紙 白米 杠葉 裏白 薮柑子を敷き、その上に橙 蜜柑 栢 勝栗 野老 伊勢海老 柿 熨斗など山の果類は左に、昆布 飾り昆布 本表

を奉る。屠蘇は銚子の渡りに結いつける。〔諸礼調法記大全・天〕にも正月朔日、三酒、屠蘇・白散・度障散*を奉るという。屠蘇は紅の袋に入れ、晦日の亥の刻（夜十時）に井戸水一尺程上に吊り下げ、元朝寅の刻に取り上げ、柳の枝に結い付けて酒の中へ入れ、柳の枝を長柄に持ち添えて御酌に参る。三ツ盃を主人が上の盃一ツで三献飲む。座中の少年より飲み始める。〔重宝記・礒部家写本〕には「屠」の字は「戸」冠りがよく、「尸」冠りは悪い。白朮・桔梗・山椒・防風・肉桂（各三匁）、細辛（一匁）、紅花（五分）の七味とする。

㉑〜㉗長友千代治編著『江戸時代生活文化事典　重宝記が伝える江戸の智恵』（勉誠出版）

の類など海草は右に飾る。根松　薮柑子は花包みにして向うに置く。また熨斗も包んで置く。切熨斗　切昆布は前の方に飾る（図470）。俗家では寄炭　香の大豆　梅干等も飾ることがあるとし、種類は例えば「亀甲菓子蓬莱」「蓬莱丸［長］州浜」等があり、「蓬莱居台（奈良蓬莱）」の寸法は指渡し一尺四寸五分　横二寸二分　筒高一尺五分とあり、「小蓬莱」（寸法略）もある。飾り物については「しまだい（嶋台）」「すはま（州浜）」参照

㉘ 江戸狩野御用絵師家系図



㉙ 浅草猿屋町代地分家

洞元邦信――洞琳波信――洞寿克信――洞庭興信――洞琳由信――洞寿栄信――洞庭教信――広光

㉘㉙武田恒夫『狩野派絵画史』（吉川弘文館）

㉚ **出頭人**　しゅっとうにん

近世初期、幕府老中や諸大名家の家老などの職制が確立する以前に、将軍や大名の側近にあって幕政や藩政に参画し、権勢を振るった者。常時主君の側に出頭していたので、この呼称がある。近習出頭人ともいう。

一般家臣に対する出頭人の権勢の根源は、主君の寵愛・信任を受けて君側に侍し、主君と家臣との間を取り次ぐところにあった。主君の意思を伝達するに当たって、その裁量により自己の意思を介在させることを認められていたが、そのような場合も、彼の意見は主君のそれと見なされたからである。彼らは、主君の幼少のころから遊び相手としていっしょに育ち、またその親衛隊である*小性組などの隊頭を兼ねることもあり、主君との間に情緒的な一体感が成立していることが多かった。目をかけられた主君が死ぬと、彼らの多くは権勢を失ったが、またあの世で主君に近侍するために*殉死する出頭人も少なくなかった。老中や家老が成立した後も、*側用人などの名で実質的に側近が権勢を振るう慣行は幕末まで残った。　高木昭作

参　高木昭作『日本近世国家史の研究』岩波書店、一九九〇年。深井雅海『徳川将軍政治権力の研究』吉川弘文館、一九九一年。

『日本史大事典』（平凡社）

㉛

にわたけ 庭田家　宇多天皇の皇子敦実親王の三男左大臣源雅信の十世権中納言経資を祖とする。経資の孫重資のあとは庭田と田向の二流に分かれ、重資の女資子は崇光天皇に近侍して栄仁親王(伏見宮初代)を生んだ。また重資の男経有の女幸子(敷政門院)は栄仁親王の王子貞成親王(後崇光院)の室となり、彦仁王(後花園天皇)を生むなど、皇室および伏見宮と深い関係を有した。公家としての家格は羽林家(旧家)で、権大納言を先途とし、江戸時代には三百五十石を給された。代々、神楽の家として朝廷に仕えたが、重条は朝廷の重職である議奏・武家伝奏を、重孝も議奏を勤めた。幕末維新の際、重胤は議奏加勢・国事御用掛などに任じ、重能の女嗣子は仁孝・孝明の両朝に仕え、文久元年(一八六一)和宮の降嫁に従って江戸に下り、慶応三年(一八六七)に没するまで京方女房として宮に侍側し、『静寛院宮御側日記』を残している。明治十七年(一八八四)華族令の制定により、重直が伯爵を授けられた。

雅信―時中―済政―資通―政長―有賢―資賢―時賢―有資=経資―茂賢―重資―
- 経有―重有―長賢―雅行―重経
- 資蔭(田向)
- 資子
- 幸子(敷政門院 後崇光院室 後花園天皇母)

重親―重保―重具―重定―重秀―雅純―
- 雅秀=重条=重孝―重熙―重嗣―重能―
- 重条
- 重基―重胤―重文=重直(伯爵)

㉜

かいし クワイ【懐紙】〔名〕①たたんで懐中に携帯する紙。詩歌の草稿や、その他書きつけ、あるいは包み紙、拭い紙などとして使用した。ふところがみ。たとう。たとうがみ。＊小右記―寛弘二年正月一日「今日次第若注懐紙歟」＊随筆・胆大小心録―二一「人にやいわれぬ三条のどこやらの会所がようにせる。それは銀一両づつで、たん尺も懐紙もとっていれば、是(これ)では水ものまれぬ」②詩歌、連歌、俳諧を正式に記録、詠進する時に用いる料紙。檀紙、奉書紙、杉原紙など。寸法、折り方、書き方などにおのおの規定がある。＊吾妻鏡―延応元年九月三〇日「於三御所二有二和歌御会一、〈略〉佐渡判官等各献二懐紙一」＊十訓抄―一・知房被称美其詩立腹事「件の懐帋の草案共を定頼中納言とりて〈略〉つかはしたりければ、範永が哥を深く感じて、彼哥のはしに範永誰人哉和哥得二其躰一と自筆にてかき付られたりけるを」＊源平盛衰記―三三・平氏九月十三夜歌読事「会紙(クハイシ)を勧めけるに、寄二月恋一云ふ題にて」＊虎明本狂言・連歌盗人「『いや誠に懐紙があるは、いつのくわいしじゃな』『去年の十月一日』」＊俳諧・三冊子―白双紙「懐帋の事は百韻本式也(なり)。五十韻・歌仙みな略の物也」〔発音〕〈歴〉〔名〕〔京〕〔古〕〔古辞書〕下学・文明・伊京・明応・饅頭・黒本・易林・書言

『日本国語大辞典』(小学館)

㉝

9250 【訖】字本 言(10) 3 キツ(漢)〔居乞切〕〔物〕

〔字義〕①おわる。おえる。〔斉民要術・大豆〕「刈訖則速耕」〔類〕畢。→付録「同訓異義」②とどめる。とめる。「訖息」〔穀梁・僖九〕「毋レ訖レ糴」〔類〕止。③たつ。〔書・呂刑〕「典レ獄非レ訖二于威一」〔類〕絶。④ことごとく。〔書・秦誓〕「民訖自若レ是多レ盤」〔類〕尽。⑤とうとう。ついに。〔漢・王莽伝中〕「莽以二錢幣訖不レ行、復下レ書」〔類〕竟。⑥いたる。およ

〔文〕〔読み〕おえる(ふ)・おわる(をは)・ついに(にひ)

㉞

頼聿庵(らい いつあん) 享和元年～安政三年(一八〇一～一八五六)

広島藩儒。名は元協、字は承緒、通称は都貝雄のち余一と改めた。号は聿庵・鶴年・春嶂とも称した。頼山陽の長男。母は御園道英の女淳。聿庵を妊娠中に山陽が脱藩を企てたため離縁され、聿庵は母の生家で享和元年二月二十日に生まれた。生後は母の手を離れて祖父母の頼春水夫妻に養育され、文化十二年四月六日、十五歳のときに春水の嫡子となり、翌年春水の死去によって家督を継いだ。若年のため、叔父の春風・杏坪(きょうへい)が藩命を受けて聿庵に春水の学問を教授した。文政元年藩学問所に出仕。天保二年五月初めて江戸詰となり、江戸に行く途中京都で父山陽と対面した。また翌三年九月に父山陽が病没したとき、父の著「日本外史」を藩主斉粛に献上した。同年奥詰次席、同十二年奥詰に進んだ。また世子慶熾の侍講を勤め、書道も教授し禄百八十石にまで加増された。公職のほか、春水の学統も引き継ぎ家塾天日堂を興し、学生三百人前後が学んだ。朱子学の門人としては山田十竹、河野小石などがいる。書ははじめ春水の書法を学んだがのち父山陽を真似、また中国の顔真卿および蘇東坡の書法を採り入れて書風としたが、山陽の没後は書風が一変して、筆鋒雄勁よりも奔放に移ったといわれる。植田兼山・加藤宗櫨とともに芸州翰墨物裡の三傑と称された。父の京都の遺族に対し

「重直

参考文献 『庭田家系譜』

（川田　貞夫）

『国史大辞典』（吉川弘文館）

『角川大字源』

ぶ。…まで。「訖今」〔書・禹貢〕「声教訖二于四海一」

（同）迄（旧）至・到。

㉟ 浅野忠（あさの　ただす）

文政二年～明治二十五年（一八一九～一八九二）

広島藩家老。同藩家老職三原浅野家十一代。名は忠助、忠厚のち忠。通称は仲之丞、主殿、大和、飛驒などと称し、家老職在職中は主に遠江といった。号は榎蔭。文政二年十月十八日、三原浅野家九代忠順（忠修、修ともいう）の二男として三原に生まれる。母は岩本氏、名は義登のち美知。六歳のとき父が卒した後はその内室桂寿院の住居に移った。同十一年広島屋敷に移り以後ここに居住した。天保十三年六月、二十四歳のとき十代忠敬の養子となり、翌年九月家督を継いで、弘化元年から嘉永元年まで三原浅野家内の改革に努めた。嘉永二年三月通称を遠江に改める。同六年ペリー来航以降、幕府・各藩ともに軍備充実を図ったが、広島藩では古流から西洋流への切り替えが容易でなかったため、広島城内八丁馬場の同家上屋敷の書院を廃して調練場とし、同家家臣の西洋流武術鍛練を行った。一方、当時藩政を掌握していた執政今中大学に反対し、その弊害を除くため、黒田図書・辻維岳（将曹）・小鷹狩正作・石井修理などと計って、今中を自宅に招いたり、意見書を出すなど努めたが改められなかったため、同年十二月、同じく家老職にある上田主水・浅野豊後とともに、藩主斉粛に大学罷免の建白書を上呈し、翌安政元年正月十九日、今中大学は中老格を命じられたが、政局は二川清記・生田筑後の掌中に帰し、改革策は失敗した。同二年広島において新藩主慶熾に拝謁し、二川・生田らの失政を論じ、意見を述べたが容れられず、翌三年三月病気と称して、養父忠敬の五男忠英を立てて隠居し三原に移った。三原城内では南館を建てこれを住居とし、城北桜山に砲台を築き、山の後ろは切断して竪堀を浚い柵を構えたほか、沿岸の要所に砲台を築くとともに大砲を鋳造し、西洋調練を用いるなど大いに改革に意を注いだ。安政五年長訓が藩主を継いだ後、文久二年五月広島に出て登城し、閏八月には折々出仕し藩政の相談にあずかるよう内意があり、年々蔵米一千俵を給されることとなった。明治元年、本藩の藩政改革にあたっては副総督となり、奥州出兵の指揮にあたるなど尽力したが、翌二年病気のため辞職し、藩主長勲から維新の功績をもって佩刀を下賜された。廃藩置県後、旧藩士の窮乏を救うための授産組織「同進社」の設立に努めた。同五年安芸国厳島神社の初代宮司、翌六年淡路国伊弉諾神社宮司、同年四月再び厳島神社宮司兼大議義、五月権少教正、同七年九月少教正を兼職した。同十六年従七位に叙された。同二十五年十二月十四日病没。享年七十四歳。左官町妙頂寺に葬られた。葬祭はすべて神式をもって行われ、法名はない。大正五年追贈され正五位を贈られた。

〔「浅野忠君賛言」、「浅野忠君密記書抄」、林保登『芸藩輯要』、『広島市史』、『三原志稿後編』〕

〈井野美津子〉

『三百藩家臣人名事典』6（新人物往来社）

ては、異母弟復二郎・三樹三郎を広島に招いて養育するなどの援助を行った。容貌・音声は山陽に酷似していたといわれる。嘉永三年三月六日四十八歳で隠居し、家督を元啓（通称東三郎）に譲った。安政三年八月三十日病没。享年五十六歳。比治山安養院に葬る。父山陽の遺著出版に尽力したほか、聿庵自身も「聿庵詩稿」「聿庵詩鈔」「聿庵遺稿」「聿庵遺稿拾遺」等を著した。

〔坂本箕山『芸備偉人伝』、『広島市史』〕

〈井野美津子〉

家乗系譜

作成　平成十六年二月　改定　平成二十七年月

来歴・・「村上家乗の歴史（材料）」これは西村講師より別途与えられた資料にて、村上家乗の寛政十一年五月より元治元年十二月までの期間で系譜に関係ある記事が抜き出されている。　これに家乗の慶応二年の記事、及びこの二つをもとに更に同好会で配布された講師史料を加えて調整したものである。

（以上、平成十六年　河内）

以来家乗を読み継ぎ、十年余の経過を機に有志により系譜の見直しを行い、修正・加筆したものである。未だ見逃し・間違いも多く有ると思います。発見の節はご指摘を願います。

（平成二十七年）

親族関係の見方（ ═══ 婚姻関係　――― 実子　- - - - 養子）

村上家乗系譜、含む慈君系譜

①　三郎右衛門＊1

- 慈眼院　利円廟　不遷廟
- 〃室　慈光院　妙円廟

②　甚兵衛＊2

- 普照院　誓円廟
- 〃室（わん）（山田氏）　普観院　受安廟

③　彦兵衛＊3

- 大融院　潤誓廟
- 〃室　大教院　休誓廟

④　勇蔵＊4

- 常称院
- 阿古代（すよ）＊5（桑原氏）　信楽院

⑤　藤次郎＊6（藤川氏）　能称院

- 女　天明六年流産　一泡童女
- 女　天明七年死産　幼光童女
- 松之助　寛政七年生　同九年没　秋月童子
- 嘉世（阿重）寛政九年生　星衛門室
- 男　享和元年死産　智教童子
- 女　享和三年死産　貞乗童女

⑥　星右衛門＊7（木野氏）　超徳院

- 正介　天保十五年没　三才　秀山智英童子
- 松濃　弘化四年生　嘉永二年没　芙蓉院秋露童女
- 幾三郎　嘉永四年生　安政二年没　実山賢秀童子
- 他三郎　安政二年生　同年没　義純童子
- 長槌　安政四年生　安政六年改名千代雄槌　文久三年没　実応源心童子

⑦　彦右衛門＊10　家乗続編筆者

- 並〃＊11（木野氏）
- 順　文政三年生　同年没　貞善童女
- 万之進＊12（森岡〈養子）

⑧　敬次郎＊13（堀尾氏）

阿重＊8

- 勇蔵娘　秀光院　妣廟
- 仙（慈君）＊9
  - 梅　天保五年生（1834）　幼名おつね　（辻へ嫁す）
  - 庫吉　天保八年生　同十年没　宝国童子
  - 寿祥院

此処に含まれる系譜は次のとおり。

村上家系譜、含む慈君系譜			
森岡系譜	辻系譜	木野系譜	
藤川系譜	久留系譜	岩崎系譜	
丹羽系譜	水谷系譜	堀尾系譜	
深町系譜	渡辺系譜	長束系譜	
佐藤系譜	高木系譜	桑原系譜	

＊1三郎右衛門：奴可郡未渡村の産。宮崎家に仕え、後推挙により足軽として東城浅野家に召抱え。宝永二年八月九日没。　室　妙円廟　享保十年十月廿四日没。

＊2甚兵衛：足軽。宝暦四年九月廿二日没。　室　於わん　明和四年十一月廿一日没。

＊3彦兵衛：歩行組に取り立てられる。宝暦十二年閏四月廿一日没。　室　宝暦七年十一月廿七日没。

（以上三代の墓は東城徳了寺）

＊4勇蔵：信志（さねゆき）宝暦三年生。十歳にて跡目相続、四十一歳勘定奉行、四十九歳御用人、文化四年五十五歳の時新知百石、御家司となる。異例の大抜擢と言える。文化五年五月七日没。寛政十一年四十七歳の折り藤川藤次郎を将来の聟として養子にする。

＊5阿古代：桑原秀蔵娘。天明六年二月廿二日嫁縁。天保三年没。六十四歳

＊6藤次郎：藤川武左衛門四男　信好（さねよし）　天明八年生。寛政十一年十二歳の時養子。文化五年勇蔵の跡を継ぐも同年八月廿四日没。二十一歳

＊7星右衛門：木野文右衛門九男清九郎　寛政五年生。文化五年八月十六歳の時養子。同年十月十八日家督を継ぐ。　元名正欽字子崇、同十二月名信度字君節と改む。号は南坰。又、文化十三年名邦韶（くにつぐ）字九成と改める。天保四年用人並。天保九年用人新知百石。天保十五年正月隠居。弘化三年三月十六日没。五十三歳。

＊8阿重：四代勇蔵娘。寛政九年八月十一日生。文化十年二月廿五日藤川養女の形を整え星右衛門の嫁に。天保元年三月廿二日没。三十四歳。

＊9お仙：安政六年古稀の祝の記事より経歴を略記する。寛政二年生。若い頃不仕合せの経緯あり。その頃星右衛門の妻阿重（彦右衛門母）他界し、引続き祖母阿古代も他界、依ってお仙を妾の会釈にて天保三年十二月村上に入れる。娘お梅を産む。星右衛門没後お梅は辻清人に嫁す。星右衛門没後十四年の安政七年（万延元年）彦右衛門はお仙を母の会釈にすべく申し出て許される。家乗にては慈君と記される。明治十四年二月六日没。九十二歳。（左系図参照）

蔵田彦蔵――蔵田百太郎　上御書役翰列
　　└二男　吉光軍右衛門　右近様御家中　文政五年没　無庵一甫居士――お仙（村上星右衛門の妾となる）

＊10彦右衛門：幾太郎　文化十一年六月十六日生。文政三年改名角人。天保六年御小姓組召出。天保十五年正月三十一歳にして禄高百石のまま家督を継ぎ、同年二月用人を命ぜらる。これ又異例の事であった。嘉永四年彦右衛門を名乗る。嘉永七年出衛様用向引受。安政四年加増三十石。安政五年御米銀引受。安政六年出衛様用向宥免。万延二年御家司四七歳。足知二十石共知行高百五十石。諱邦裕（くにやす）、字君綽。

＊11お並（おみつ）：木野左守娘。木野一馬妹。天保七年四月十五日嫁縁。家乗では家小と記される。

＊12万之進：文政六年十一月廿三日生。天保四年森岡氏へ養子。十三歳。

＊13敬次郎：堀尾善太夫二男。堀尾勝登弟。嘉永六年九月四日生。文久三年九月四日十一歳の折り厄介（半養子）とする。後年男爵、昭和四年没。

森岡系譜　東城浅野家中

森岡十兵衛 ┈┈┈┈┈ 万之進（村上氏）＊1
　　└┈┈┈┈┈ 晴
　　└┈┈┈┈┈ 時太郎（高木氏）――新太郎　明治二年生
　　└┈┈┈┈┈ 増
　　└┈┈┈┈┈ ゆき
　　└┈┈┈┈┈ 槌
　　└┈┈┈┈┈ 信槌
　　└┈┈┈┈┈ 好

女（後室）
天保六年没　六十九才
文久二年没
松寿院

千衛（岩崎家）
天保四年聟養子
たつ（後室）（高木唯一妹）
弟婦と記される

佐代　嘉永三年生、慶応二年星野貞之助へ嫁ぐ
恵教童女
明治元年聟養子
嘉永五年生
嘉永七年生　同年没、智証童女
安政四年生　慶応元年没　薫香童女
文久二年生　明治二年村上彦右衛門の厄介になる。八歳（信太郎）
慶応元年生

＊1万之進：出生については村上家系譜に記載。諱邦靖　号子共。石高不詳。天保六年家督を継ぐ。安政四年一石御増　安政六年御目付役　明治元年二月物故。その際信槌は七才にて跡目願出は難しい。よって彦右衛門はお佐代の嫁ぎ先星野の当主幸次郎と相談する。この頃お増は高木来助長男平太郎との婚約あったが、それを破棄し高木の次男時太郎をお増の聟養子として森岡家を継がす。

辻系譜　東城浅野家中

- 辻　並次　寛政十一年現在御家司　嘉永七年没六十五才　光観院　天保十四年没
  - 室
  - 清人＊1　嘉永七年生　同年没　専祐童子
    - 梅（村上氏）　嘉永三年嫁
    - 恒次郎　嘉永元年没
    - 千之進　嘉永七年生　同年没　専祐童子
    - つね　安政三年生　お竹と改名
    - 八十槌　安政五年生　改名源之進、死亡歟
    - 吉弥　文久二年生
    - 保馬　元治元年生　専保童子
    - 美祢　慶応四年生　明治二年没　花覚童女
    - 岩太郎　明治四年生

＊1清人：明治、政徳（まさもと）と改名、後又通称喜和馬と改称

木野系譜　上田家中

- 木野文右衛門　政章（マサアキ）　俊性院　齢智院
  - 室
  - 三弥　良玄居士
    - 守衛　久野家へ養子
    - 丈治　坪内家へ養子　当観院
    - 佐守　家督相続　心鏡院（木野伯母君）
    - 又佐衛門　水谷へ養子
    - 清九郎＊1
  - 佐守　文右衛門三男　天保四年没五十一歳　要精院
    - 室（吉田氏）　安政七年没七十二才
    - 一馬＊2　瑞祥院
      - 室
      - 後室　天保十二年没　知鏡院　嫂氏と記される
      - みつ＊3
      - しけ　安政二年丹羽庄蔵へ嫁ぐ
      - 謙蔵＊4（丹羽氏）　文久二年養子
        - 吉槌　明治元年生　同二年没
        - 喜代＊5
        - 百三郎　嘉永六年生、嘉永七年没（百太郎）、智蓮孩子
        - まつ　安政二年生
        - しつ　安政四年生　明治四年岡島平之進の後妻に
        - 乙松　安政七年生　文久元年没
        - 友蔵　元治元年生　同年没

＊1清九郎：文右衛門九男　寛政五年生　文化五年村上へ入りその後星右衛門と名乗る。

＊2一馬：文化三年生。星右衛門の甥に当たる。従って彦右衛門と従兄弟に当たる。名乗正勝。嘉永七年御役御免　元治元年小方へ移る。慶応二年没、六十一歳

＊3おみつ（お並）：天保七年村上に入り彦右衛門の妻になる。家乗にて家小と記される。彦右衛門とは従妹にあたる。

＊4謙蔵：丹羽庄司二男。幼名米槌。文久二年六月木野家に養子。　慶応二年四月跡目相続。　同年九月喜代と婚礼。　知行高百石外様御馬回。

＊5お喜代：生年不詳。嘉永の生まれと思われる

藤川系譜　東城浅野家中与力十二家の一つ

始祖弥太郎　号休円　享和四年百回忌……

……藤川武左衛門　天保十年没　聞寿院

室（沖氏）　天保二年没七十九才　信受院

弥七郎＊1　室　秋教院

九五郎　香川多仲へ養子

□□次　四男　藤次郎　母脇氏　寛政十一年村上へ養子

藤川毎登　貞　天保四年産後没二十三才　法泉院

後室　嘉永二年没　法信院

後妻＊2（藤川伯母氏）

ちか　安政三年倉橋島神主藤村土佐守へ嫁ぐ

甚吉郎　天保四年生歿　明治四年家督相続

女　慶応元年生

いわ　久留庫介娘

とめ　元治元年小池良太郎倅に嫁す　慶応二年三原へ引越し

乙次郎＊3　万延二年久留庫介へ聟養子

又次郎　安政元年生　上田家士中村尚一方へ養子（又三郎）

徳吉　安政五年生　同年没（痘瘡）

男　万延元年生

女　慶応二年生

＊1弥七郎：保明君と云う歿。法信院歿。嘉永二年没歿

＊2後妻：木野家の娘（星右衛門の姉妹）または木野伯母君（心鏡院）の姉妹。

＊3乙次郎：村上彦右衛門は過去この乙次郎も養子の候補としていた。

久留系譜　三原浅野家中

久留彦兵衛――庫介――いわ　藤川甚吉郎に嫁す

娘――乙次郎（藤川より）

岩崎系譜　東城浅野家中

岩崎□□　喜東次と云う歿　天保十二年没歿

室　安政四年没　是信院

岩崎常介　文久元年没　一乗院

よし＊1

妹（西川理三郎母）

安政六年没

善助＊2　渡辺に入る

良之進　安政六年御祐筆　万延二年跡目相続

先妻　主水様家中　中村雅登妹　安政六年嫁

後妻　上野吉郎次姉　万延二年縁組

源之進、嘉永七年三原藤井左内へ聟養子

捨三郎　天保六年生　改名保之進＊3

重吉、万延二年安井平治方へ養子

喜久

姉、菅へ

佐嘉登　元治元年生

＊1およし：慶応二年三月五日記事、村上と親戚、かつ下瀬との関係あり。

＊2善助：常介弟　龍徳兵衛、趙銅斎、潜龍、逸枚、岩崎潜龍のこと。

＊3捨三郎：慶応二年四月朔日記事、武内純介へ養子。

丹羽系譜　上田家中

丹羽□□ ── 正司 ── 正蔵　元治元年家督相続　伝吉　万延元年生　文久二年没
　　元治元年隠居　　しげ　木野一馬娘　恒　慶応元年生
　　妹　米槌　木野へ養子、謙造のこと　清松
　　（山田多喜登母）　女　万延元年桃井忠兵衛倅へ嫁す同五月和談の上離縁

水谷系譜　上田家中

水谷□□ ═══ 又左衛門（木野氏）＊1
　室（水谷先伯母君）　天保十一年閉門仰付らる　八十郎（福田氏）＊2
　文政七年没　安政五年没　大寿院　安政五年の時跡目相続　百十五石　御馬回
　連証院　室（水谷伯母君）　文久二年前髪を取　後　貢と改名
　明治二年没　永照院　たけ　田野浦へ嫁す

＊1又左衛門：星右衛門の実兄

＊2八十郎：又左衛門と八十郎の年齢が大きく違う。此は嫡孫承祖、つまり孫に継がせたゆえ。福田とは福田大蔵（慶応二年没）のこと。

堀尾系譜　東城浅野家中与力

堀尾眠石 ═══ 善太夫＊1
　五郎八　号元迪　安政三年御用人
　万延元年没八十五才　文久三年隠居
　純忠院　室（深町氏）
女（栗原氏）（老室）　文久二年没
　慶応二年二月没　随心院
　詮寿院

内室（長束市郎右衛門娘）
　文久二年入れる ── 貞登　慶応元年生
　とめ（おとみ）、元治元年生、同年没

勝登＊2 ═══ 文久三年家督相続、百三十五石　女　慶応三年生　ふさ歟
　むら（平野伝右衛門娘）＊3　竹槌　明治二年生
　元治元年嫁入、その後離縁
後室（長束清次郎娘）
　慶応元年嫁入
直（おちか）＊4、生年不詳
敬次郎＊5　嘉永六年九月生文久三年村上に養子

＊1善太夫：旧名精一郎という。天保七年御小姓組召出。安政三年善太夫を名乗る。慶応二年においては嘉膳・嘉善とも記される。改名して笑右

＊2勝登：幼名千賀代槌または幾之進、安政七年召出、五人扶持、文久三年御側詰御用部屋出勤、元治元年御用人並

＊3おむら：離縁後、上田家家中桃井保衛の後妻に入る、慶応二年。

＊4おちか：家乗慶応二年に記事あって、正月に岡島への縁談の話し、その後病を得るが十一月に縁組願いの記事あり。

＊5敬次郎：村上家系譜を乞う参照。

深町家　三原浅野家中

深町□□
- 男　真喜太、慶応二年御目付次席、御側詰
- 女（堀尾へ）

長束家（同右）

長束□□
- 市郎右衛門　慶応元年没
  - 清次郎歟
    - 吉之進歟
  - 女（堀尾後妻に入る）

渡辺系譜　東城浅野家中

渡辺□□
- 宗右衛門　二百五拾石　文化十年より家司　嘉永六年七十才賀　嘉永七年没　仙寿院
  - 室＝雅登　安政六年跡目相続　二百石　御用人　（上田用人横関女）
    - 吉太郎　慶応二年正月召出、御児小姓　同年二月御養子様御附　同年十月御次詰
    - 馬之丞　三男　万延元年没
    - 嫡女　文久三年三宅へ嫁入
    - 次女　文久三年生
    - 三女歟　慶応二年九月没

佐藤系譜　東城浅野家中与力

佐藤与三右衛門　百六十石　安政三年三月隠居　同年六月没　六十五才　大禅院
- 益之丞　嘉永七年妻（徳永）を離縁　安政三年跡目相続　百四十五石　安政六年御用人並　文久二年御用人
  - 喜代見　前名喜代槌歟　文久二年御小姓組召出　慶応二年御用達定加、御養子様御附　安政三年三宅吉左衛門養子所望 11/10　元治元年病死
  - 猶人
  - 三助

高木系譜　東城浅野家中

高木□□
- 唯一←（同一人物歟）→来助　文久元年野原八右衛門へ養子
  - 室＝後室　万延元年病死
  - 二勇友之進
- たつ（唯一妹・万之進後妻）

桑原系譜　東城浅野家中

桑原吉郎次
- 秀蔵　改七左衛門清方　文化十二年没　心誉寿栄信女
  - 文蔵殿（位置不明）
  - 女
- 小左衛門　文化十二年没　源入良栄信士
  - 阿古代（村上へ）
  - 喜太郎（徳明）ほか四人
- 吉郎二姉（緒方愛蔵母）
- 吉郎二
  - きく　山中権之進へ嫁す　文久二年没
  - 俊太（竹吉）　文久三年軍艦方役所　軍艦乗組　文久元年現在八十六歳
  - 女　万延元年没

＊高木・桑原は疑問点多し

行政 2006 市中央図 210.0

1855

新暦1・1=2・17

安政2年（あんせい）

乙卯（きのとう）

皇紀2515年

【中国】清・咸豊5年

【朝鮮】哲宗6年

陰暦月の大小、閏月、毎月1日の干支

1月	小乙丑
2月	大甲午
3月	小甲子
4月	小癸巳
5月	大壬戌
6月	大壬辰
7月	小壬戌
8月	大辛卯
9月	大辛酉
10月	小辛卯
11月	大庚申
12月	小庚寅

【天皇】孝明　【先皇】

【将軍】徳川家定

【関白】【武家伝奏】鷹司政通　三条実万・東坊城聡長

【老中】阿部正弘・松平乗全（～8・4）・松平忠優（～8・4）・久世広周・内藤信親・堀田正篤（正睦（10・9～））【京都所司代】脇坂安宅　【大坂城代】土屋寅直　【江戸町奉行】井戸覚弘・池田頼方

指標

- *清国船漂着
- *日米和親条約批准書の交換
- *琉球型大砲船、竣工
- *講武所を建築
- *子供芝居興行
- *鳥取藩藩政改革

政治・経済

1・1（2・17） 清国商船一艘、伊勢度会郡田曽浦に漂着する。〔蛮夷貿易濫觴〕

1・5 アメリカ使応接掛井戸覚弘ら、アメリカ使節アダムスと伊豆下田長楽寺で、日米和親条約批准書の交換を行う。〔亜墨利加艦初航一件〕

1・11 吉田松陰とともに渡航を企てた金子重之輔(25)、萩の野山獄で病死。〔踏海志士金子重之輔・忠節事蹟〕

1・16 幕府、徳川斉昭の領事駐在規定反対の意見をいれ、日露和親条約の再交渉を決定する。不成立となる。〔水戸藩史料〕

1・16 韮山代官江川太郎左衛門（英龍・坦庵）(55)歿す。〔江川坦庵翁言行録・江川家系譜〕

1・27 アメリカ商船カロライン＝フート号、下田に入港する。**2・2** ロシア使節プチャーチン、伊豆戸田から下田に赴き、戸田のロシア人を帰国させることを依頼する。〔豆州下田港魯西亜船〕→【2・25】

1月 幕府、江戸築地に講武所を建築する。〔嘉永明治年間録〕

1月 日向美々津浦に清国船が漂着する。〔高鍋藩続々本藩実録〕

2・3（3・20） 鳥取藩、在吟味役佐野増蔵らを在方御改正御用掛に任命し、在方改革を骨子とする藩政改革を始める。〔在方御改正御用日記〕

社会

1・2（2・18） 朝廷、二十二社および諸国大社に国家安泰を祈らせる。〔橋本実久日記〕

1・23 鹿児島藩建造の琉球型大砲船（のちに昇平丸と命名）竣工する。**2・13**〈昇平丸〉、鹿児島出港。**3・18** 品川着。〔島津家国事執掌史料〕「二月　薩州に於て製造の船琉砲船江戸海に着ぬ。琉砲船長十五間、檣三本出し共裾黒の帆標帆三段に掛け中程に裾黒の吹流し付、艫の方日の丸、並響の紋船標、小織布交の吹貫を立つ。」〔嘉永明治年間録〕

1・29 江戸本所駒留橋北の松前侯屋敷から出火、三宅侯ほか大名屋敷など武家屋敷が多く焼ける。横網町・小泉町、回向院など焼失。〔増訂武江年表〕

2・18（4・4） この日より八十日間、江戸浅草寺観世音開帳参詣者多数あり。松本喜三郎作の活人形、竹田亀吉作の大象、竹田縫之助作の市川団十郎の活人形、

文化

1・11（2・27） 幕府連歌会。

千代もみん動かぬ岩根松の春　昌固
霞む砌に鶴馴し声　内大臣殿
風ぬるく明はなれ行く雲井にて　通良
月の入江の波しづかなり　昌春

〔巷街贅説〕

1・16 備後福山藩、藩校誠之館を創設。〔文武奨励の書〕

1・17 〔儒者〕河田迪斎(54)歿す。〔関八州名墓誌〕

1・18 幕府、小田又蔵・勝麟太郎（海舟）・森山栄之助・箕作阮甫を異国応接掛手附・蘭書和解用掛とし、洋学所設立の準備を始める。**8・30** 古賀謹一郎、洋学所頭取となる。〔安政年録・藤岡屋日記〕

1・24 〔画家〕粟田口桂林歿す。〔東京美術家墓所誌〕

1月 江戸回向院境内にて、子供芝居興行。〔増訂武江年表〕

2・1（3・18） 右大臣近衛忠熙、弘前藩主津軽順承が花生および花台を朝廷に献上したことについて、天皇が嘉悦さ

新・国史大年表 国書

＊ビスケット・兵糧パンの製造

＊富山城下火災

＊蝦夷地全土直轄領

2・5 幕府、御留守跡部良弼らを講武場総裁に任ずる。〔鈴木大雑集〕 **5・11** 幕府、講武場の教授内容の訓示をだす。「講武場に於て、炮術・槍・剣・水練稽古などの儀相達し置き候えども、御軍制御改正御治定の上は、御軍法をもって操練専一に仰せ付けらるべく候間、只今よりその心得にて稽古など相始め候様いたさるべく候事。ただし炮術の諸流入り交りにては、操練も調じかね申すべく候間、講武場にては、西洋流一様にいたし候心得にて、教授方名前取調べ、申し聞かるべく候事。」〔藤岡屋日記〕

2・9 尾張藩、藩政改革を命ずる。〔名古屋徳川家譜〕

2・11 江川英龍・英敏父子の努力による伊豆韮山の反射炉で吹始めが行われる。〔反射炉御取建日記〕

2・11 将軍、品川御台場で大炮の試射を見る。〔藤岡屋日記〕

2・22 幕府、松前領のうち松前氏の居城附近を除き蝦夷地全土を直轄領とする。 **12・4** 替地を与える。 **翌年・3・5** 箱館奉行堀利熙、受領する。〔温恭院殿御実紀・蝦夷地御用留〕

2・23、27 アメリカ軍艦一艘、琉球那覇に入港。沿海を測量する。 **3・7** アメリカ軍艦一艘、那覇に入港。 **13** 三艘とも出港、下田に向かう。〔琉球評定所記録〕

2・25 カロライン＝フート号、戸田滞在のロシア将兵四百二十余人のうち約百五十人を乗せて無断でロシアに帰国させる。このとき、フート号船長ワースの妻ら婦女子十一人を下田に残していく。 **4・13** フート号、下田入港。 **15** 婦女子を乗せて出港。 **6・11** プロシア商船グレタ号、ロシア将兵プウシキン大尉以下二七八人を乗せ下田出航。〔川路聖謨日記・村垣範正日記〕

2・29 幕府、諸大名に倹約を命ずる。〔安政録〕

2・23 また増鏡勝代の綱渡りなどの見世物人気を呼ぶ。〔増訂武江年表〕

2・24 長崎でオランダ医学修学中の水戸藩の柴田方庵、コンプラ（出島への日用品売買者）からパンとビスケットの製法を学ぶ。藩命による兵糧パン製造のため。〔方庵日記〕

2・30 江戸北紺屋町から出火、白魚屋敷・五郎兵衛町・南鍛冶町・畳町・南伝馬町など焼失する。〔増訂武江年表〕

2月 富山城下火災。城内および民家六千戸を焼失する。〔殿居茶話〕

2月 「余寒強く、去年より雪更に降らず。」〔増訂武江年表〕

講武場御取建てにつき、講武場総裁久貝正典（大番頭）・池田長顕（書院番頭）ら幕府に四十二箇条を建議。

「一、稽古人の儀は、寄合、御番衆、小役人、小普請、布衣以上以下、惣領、次三男、厄介、御目見以下、諸組同心等に至るまで、日割を立て、稽古仕らせ、もつとも日割のほか日々罷り出で候儀は勝手次第に仕り、布衣以上、御役人等も罷り出でたき者、勝手次第罷り出で、かつ陪臣等罷り出で候儀は、追つて取調べ相親ひ申すべく候。

一、砲術の儀は、諸流一同に相用ゐ、大砲は重に西洋流を相用ゐ候様仕るべく候。船打、町打等の節は玉、薬等下し置かれ、平常稽古打は御用稽古の玉数相定め、玉、薬とも下され候様仕りたく、御筒拝借相願ひ候者へは、場所限り貸渡し申すべく候。

一、西洋流台場打稽古のため、護胸壁取建て置き、打方手続等、稽古仕り候様仕るべく候。

一、合薬等、諸流にて少々づつ製方分量等相違仕るべく候へども、おほよそ同様の儀御座候へば、稽古人自身製方仕り候儀につき、硝石、硫黄、灰、そのほか業により樟脳、松脂、その余用ゐ候品々、いづれも品にて受取り、合薬仕り候様仕るべく、れたと書を送る。

「漸く春暖を催し候。弥々平安に候や、先頃、内裏炎上に就きて、御機嫌を窺はれ、此方え頼まれ候て、国産の品々進献なされ、勾当内侍に披露を遂げられ、叡慮浅からざる趣、女房奉書到来候故、則ちこれを贈る。当家と格別の由緒柄も、叡聞に達し、畏悦の事に候なり。

二月朔日　忠熙

弘前侍従とのへ

追申、此の亭各々無異に候。心安かるべく候なり。」〔津軽氏文書〕

2・2 （画家）鶴沢探龍歿。〔芸文家墓所誌〕

2・13 （大坂の女形）二世中村富十郎(70)堺で歿す。〔歌舞伎年表〕

2・14 金泥絵料紙墨書「孝明天皇宸翰御製」一巻〔奥書—陽明文庫〕

2・28 類焼した江戸三座普請でき、河原崎座、「鏡模様比翼花鳥」 **3・7** 中村座、「花舞台団若曾我」 **16** 市村座、「鏡山再盛花硯曳」初日。〔歌舞伎年表〕

2月 歌川国芳筆「一ツ家図絵馬」〔款—東京浅草寺〕

川崎市旧伊藤家住宅〔仏壇前面板戸墨書銘〕

指標	政治・経済	社会	文化
*江戸大火	3・4(4・20) フランスインドシナ艦隊司令官モンラベル、軍艦コンスタンチーヌに乗り、下田に来航。7去る。〔福田作太郎筆記〕	3・1(4・17) 江戸大火。江戸小網町から出火、小網横町・照降町・堀江六軒町・葺屋町・堺町・新材木町・大坂町・住吉町・馬喰町・薬研堀町・旅籠町・茅町など町数六十八町、武家地とも長さ十三町余、幅平均四町ほどが焼失する。〔増訂武江年表〕	3・1(4・17) 京都に刀脇差小道具屋仲間が再興する。〔正行院文書〕
*刀脇差小道具屋仲間			3・6 〔江戸の女形〕初世坂東しうか(43)歿す。〔歌舞伎年表〕
*フランス軍艦下田に入港	3・11 フランス軍艦コルベール、下田に入港。13退去する。〔堀口貞明筆記〕		3・9 福沢諭吉、大坂の緒方洪庵の適塾に入門。〔福沢諭吉全集〕
*梵鐘で小銃鋳造	3・12 イギリス軍艦シビル、ホルネット、ビターン、箱館に入港。22退去する。〔箱館港亜墨利加船〕「同所え三月十二日渡来唉咭唎船三艘、フレカツトの船将対話の節、通弁候日本人、力松、天草島原辺の出生、十三歳の時漂流、当時唐国ホンコンに居住、亜墨利加の女を妻とし、子供三人の内壱人死去、当時諸国評判記判元之方相勤、日本漂流人の世話致し居り候て、不自由これ無く、帰国の念これ無き旨。」〔『水野忠徳雑録』之一「安政二乙卯年雑録」〕〔力松は天保五年に漂流〕	3・3 幕府から寺院への通達。「海岸防禦のため、この度諸国寺院の梵鐘を以て、大砲・小銃を鋳換ふべきの旨、仰せ出され候。右は武備御充実の御趣意に候間、この外銅・鉄は勿論、錫・鉛・硝石等、何れも必備の品につき、右等にこれなく候ても相済み候品を、右類にて相製し候儀、自今相成らざる事に候。かつまた梵鐘をも鋳換へ仰せ出されしほどの儀につき、銅鉄を以て新規に仏像等鋳造いたし候儀は相成り難く候。仏器の儀も、木製または陶器等にても相済み候分は、以来銅鉄類を以て製造の儀、無用たるべく候。」〔温恭院殿御実紀・梵鐘鋳換砲銃御触案留記〕	3・12 アメリカ測量艦隊司令官ジョン=ロジャース、軍艦ヴィンセンスとハンコックとを率いて下田に入港。29日本沿海の測量を許可するよう要求する。「伊能氏実測図出でしより後は、図を用ゆる者、みなこれに拠らざるは無しと雖ども、航海者にありては最も緊急とする所の海底深浅、および磁鍼偏差をこの図中に記さざる等のごとき、充分海図の用をなす能はざるを以て遺憾に堪へずとす。外国人また、この図の経度を改むるも方位ならびに浅深等の確実を得ざるが故に、急に我が国沿岸瀕海を測ることを要せしなるべし。」〔勝海舟『海軍歴史』〕
*日本沿海の測量を要請			3・27 大坂・中の芝居、「岩見重太郎」「権三権八噺吉原」、角の芝居、「道行恋
*江戸城本丸御金蔵の盗難	3・22 ロシア使節プチャーチンら四十余名、戸田で建造したスクーナー型帆船にて帰国する。全長約二三メートル・最大幅八メートル・三本マスト、建造地にちなみ「戸田号」と命名。〔豆州下田港魯西亜船・村垣範正日記〕	3・6 江戸城本丸御金蔵内の小判四千両盗難される。安政4・2・26犯人富蔵(33)・藤十郎(39)の二人が捕えられ、⑤・13千住で磔刑。〔増訂武江年表・嘉永明治年間録〕	
*西洋式造船術	3・16 若年寄(泉藩主)本多忠徳、武蔵荏原郡大森にて大砲の試射を見る。〔本多忠徳日記〕	3・7 武蔵川越の百姓久米次郎、乱心して江戸城本丸玄関前まで侵入し、「天下を俺に渡せ」と叫び、逮捕される。〔ききのまにまに〕	
*両国橋改架	3・18 鹿児島藩、新造の西洋式軍艦〈昇平丸〉を品川沖に廻航する。〔沖一平覚書〕	3・14 隅田川の両国橋が改架される。〔安政年録〕	3月
		西洋流ドンドル〔雷管〕そのほかとても同様、自身にて製法仕り候につき、右等の諸道具ならびに製所取建て候様仕りたく候。〔勝海舟『陸軍歴史』〕	

＊食売女の年季奉公証文

に拵へ、首材、後材を建て、肋材を植ゑ、船梁を固着し、外板に及ぶ等、或は緊帯諸部を以て全体を固め、外銅板を張るにテール［木ダール］に浸せし厚紙を張り銅板に及ぶ等諸法のごとき、我が邦に伝ふるもの、この時を以て最始とす。（中略）この後、これ等の法に因りて造る船を君沢形と称し、君沢形第一、第二、第三、漸次に増製せしむ。魯人の造りて乗り去りし船も、後、我に送り還附し、当時の高意を鳴謝す。

この時、魯人に従つて就業せし諸工、多く幕府海軍所附属となり、その中、良工の今なほ存在して横須賀に到り、諸工の長たる者数名を存す。」〔勝海舟『海軍歴史』〕

3・23 フランス軍艦コンスタンチーヌ、長崎に入港。司令官モンラベル、条約締結国に準じて一港を開くように長崎奉行に書を送る。**4・10** 長崎奉行、モンラベルと会談、通商開始を拒否。**16** 出港。〔堀口貞明筆記〕

3・24 イギリス東インド艦隊司令官スターリング、軍艦ウィンチェスターに乗船して長崎に入港。**29** 条約批准書の交換を要請する。**4・1** 出港する。〔幕末外国関係文書〕

3・26 京都所司代脇坂安宅、山城太秦村で家臣の調練を行う。〔東坊城聡長日記〕

3・27 幕府、蝦夷地の警備を仙台・秋田・弘前・盛岡・松前各藩に命ずる。〔温恭院殿御実紀〕

3・29 京都市民、皇居造営費の献金を出願して許可される。〔脇坂安宅日記〕

【食売女の年季奉公証文】

食売女奉公人年季切増証文事

一、此つ禰と申す女子我等娘に御座候処、先達て我等共人主・請人に相立、去ル亥十一月廿二日より来ル酉年十二月晦日迄仲年丸拾か年壱月余、給金三拾五両に相定、貴殿方へ食売女奉公に差出申し置候処実正に御座候。然ル処此度金子急入用之儀御座候に付、来ル酉十二月晦日より亥二月晦日迄仲年壱か年二か月、給金四両壱朱也相定、只今連印之者立会金子残らず慥に受取申候。年季都合十一か年三か月、給金合三拾九両壱朱也、相違御座無く候。年季中何様之儀御座候共、滞り無く相勤めさせ申すべく候。諸事本紙請状之通少しも相背き申すまじく候、後日のため年季切増証文仍て件ごとし。

下谷御簞笥町勝五郎店
祖父・人主　嘉兵衛　印
右同居　実母　きく　爪印
武州豊嶋郡家村百姓
親類・受人　半兵衛　印
金杉村家持
口入　金太郎
奉公人　津禰　爪印
旅籠屋
源兵衛殿

安政二年
卯四月廿一日

〔神奈川本陣石井家資料〕

4・3（5・18） プロシア商船グレタ号、アメリカ船と称し箱館に入港。〔大橋宥之助筆記〕**5・21** 下田に入港。**6・1** 出航。〔大槻清崇雑記〕

4・6 イギリス軍艦サラセン、箱館に入港。**14** 出港する。**18** サ

4・1（5・16） 紀伊藩領紀伊木本村などの農民、新宮領への所替えに反対して一揆。〔木本浦村替一件書類〕

4・2 鳥羽天皇七百回忌法会、京都安楽寿院で行われる。〔公卿補任〕

の近江八景」「大功記」上演。〔歌舞伎年表〕

4月 京都・南側芝居、「浦朝霧」、大坂・堺芝居、「仮名手本忠臣蔵」上演。〔歌舞伎年表〕

指標	政治・経済	社会	文化
*馬の筋伸べ禁止	ラセン、箱館に再入港、水・食糧を求める。〔幕末外国関係文書〕 **4・29** イギリス艦ウィンチェスター、北蝦夷地に来航。**5・3** イギリス東インド艦隊司令官スターリング、久春古丹に上陸。**24** 箱館に入港。**6・4** 箱館奉行に書翰を送り、得撫島および唐太の帰属について質問する。**26** 出港。〔幕末外国関係文書〕	**4・21** 幕府、飼馬の筋伸べを禁止する。「馬の筋のべ候儀、前々より停止候処、近来拵馬多くこれ有るやに相聞こえ、如何の事に候。」〔安政録〕 **4月** 大坂の山師、近江愛知郡政所の村役人と蓬谷鉛山の発掘につき契約を締結する。〔蓬谷鉱山記録〕 **4月** 天童藩、紅花の専売制を実施する。〔東村山郡北目村文書〕	
*紅花の専売制	**5・1(6・14)** 幕府、川村修就を長崎奉行とする。〔安政年録〕 **5・2** 幕府、伊豆戸田村でスクーナー船三隻の建造を命ずる。〔村垣範正日記〕→【3・22】 **5・17** 日向都城藩、四千八百余両で領内諸村窮民の売却した田畑を買戻し、旧主に与え、農事を奨励する。〔日向国史〕 **5・18、19、21** 江戸城吹上苑にて上覧馬揃あり。〔巷街贅説〕 **5・20** 松前藩、幕命により北蝦夷地久春古丹のロシア兵の陣営を焼打ち撤去する。〔水野忠徳雑録〕 **5・20** イギリス軍艦三艘・フランス軍艦二艘、北蝦夷地久春古丹に来航。**27** 出港する。**29** 松前藩兵は脱艦水夫三人を捕えて箱館に護送する。〔大橋宥之助筆記〕 **5・21** プロシア商船グレタ号、下田に入港する。〔幕末外国関係文書〕→【2・25】 **5・22** 下曾根金三郎(信之・信敦)、弟子らと鼠山で炮術大調練を行う。〔続々泰平年表〕 **5・23** プロシア商船一艘、箱館に入港。寄港中のイギリス艦船などに物品を販売する。乗組員の上陸を要請するも許可されず。〔幕末外国関係文書〕 **5・24** アメリカ蒸気船一艘、西蝦夷地イワナイ、**25** ヲタルナイ、**30** 宗谷に乗組員が上陸。〔幕末外国関係文書〕 **5・24** 幕府、大森村ならびに徳丸原での銃砲稽古は事前に願書の提出が必要であったが、海防掛御目付への届出だけでよいと通達する。〔御書付留〕	**5・1(6・14)** 江戸牛込若宮町居酒屋遠州屋又蔵の娘さと(15)、「市谷田町一丁目なる手跡指南秀根堂某がもとへ奉公住してありしに、春の頃より男子に変ず。骨格容貌も全くの男子と成り、里次郎と改む。」〔増訂武江年表・ききのまにまに・真佐喜のかつら〕 **5・17** 京都町奉行浅野長祚、賀茂川の浚渫および堤防修築に際して洛中に夫役を課す。ついで助役の市中男女が華美を競い、かつ喧躁に流れることを禁止する。〔平田職修日記〕 **5・19～6月上旬** 安中藩では五十歳以下の藩士九十五名を十六組に分け、安中城から碓氷峠の熊野権現までの距離を走らせ速さを競わせる。初日は七名が参加。記録掛は熊野権現神主曾根出羽。〔峠町曾根家文書〕安中藩士、御遠足と称する六里十丁(二四・七キロメートル)の長距離走を行う。〔陸上競技五十年〕 **5・30** 江戸小網町小問屋久住伝吉の召仕、店の金五百八十両を担いで帰店中に、堀留町一丁目で後から切られ金を奪われて死亡する。〔ききのまにまに〕 **是春～夏** 秋田領・仙台領で野鼠が横行し、食糧を食う。石見でも横行し、五月中に三十五万四八五七匹を捕殺する。〔ききのまにまに〕	**5・3(6・16)** 江戸・河原崎座、「児雷也後日譚話」「真似三升姿八景」初日。〔歌舞伎年表〕 **5・11** 江戸城内で能興行がある。〔嘉永明治年間録〕 **5・12** 朝廷、歌道に堪能の公卿十余人に新内裏小御所絵障子の和歌を詠進させる。〔安政御造営記〕 **5・15** 福井藩、学問所を城内三ノ丸に設置して明道館と命名する。〔続片聾記〕 **5・26** (陶芸家)二世高橋道八(74)歿す。〔陶器大辞典〕 **5・30** (画家)大塚瑪蜂(61)歿す。〔東京美術家墓所誌〕 **5月** 高知藩主山内豊信が、江戸でオランダ通詞本木昌造につくらせた模型蒸気船を高知に廻航させる。**8・4** 高知に到る。〔山内豊信日記・本木昌造蒸汽雛形作成始末〕 京都・南側芝居「安栄録」「蘭奢待」「隅田川」、大坂・筑後芝居「高音波」「伊賀超」、若大夫芝居、「恋伝授」「江戸紫」、奈良・瓦堂芝居、「三代

*安中藩の長距離走

＊蒸気軍艦スンビン
＊会津若松大火
＊洋式小銃の製作
＊藩校翼輪堂
＊陸奥大暴風雨
＊鰊大網全廃強訴

5・27 将軍、浜御庭で家士の水泳を見る。〔続々泰平年表〕

5月 紀伊藩、友ヶ島に砲台を築造する。〔南紀徳川史〕

6・7（7・20） フランス軍艦シビル、箱館に来航。自艦の傷病者の収容治療を要請する。傷病兵四十余名を実行寺に収容する。9・3帰国。〔大橋宥之助筆記〕

6・9 オランダ軍艦ゲデー、スンビンの二艘長崎に入港。オランダ国王、蒸気軍艦スンビンを幕府に贈り、軍艦操縦術の伝習援助に応ずることを告げる。〔長崎港和蘭陀船・勝海舟『開国起原』〕→【8・25】

6・10 〔豊前中津藩主〕奥平昌高(75)歿す。〔中津藩史〕

6・29 幕府、諸大名および旗本に洋式銃陣を訓練させる。〔安政年録〕

6・30 徳川斉昭、老中阿部正弘に書を送り、反斉昭派の老中罷免を勧告する。

「一」〔老中牧野忠雅〕・三〔老中松平乗全〕・四〔老中松平忠固〕の一条、貴兄御身に取り候ては、さぞさぞ御心配と深察致し候へ共、かかる御大事の場に臨み、聊かも黜陟これ無く候て、非常の改正行はれ候筈は決してこれ無く候へば、国家のため御一分の御迷惑を御忍び、御決断の方と存じ候。扨て二・三は碌々備員のみ故、御転に相成るべく候へ共、四は先々御用に立ち候由、過日御内話の節も愚意申し述べ候処、今程御決心に相成り候や。愚老見込みは二・三は元より論ずるに足らず候処、四は俗論苟且御承知の通りにこれ有り（中略）、四は廟堂俗論の根元に候間、万一、二・三のみ動し、四が二番席に相成り、貴兄の権を分ち候様、相成り候はば、必ず牛角両派の勢をなし、溜初め俗論家は向に相成るべく、左候へば天下の事、奈何ともすべからず、臍をかみ候ても間に合

6・2（7・15） 摂津・河内両国一〇八六か村に菜種・油・油粕の自由売買を求めて国訴が起こる。〔福田家文書〕

6・5 幕府、江差・松前商売の場所請負を旧例によらせ、また廻船改所を箱館ほか一か所に設置する。〔蝦夷地御用留〕

6・5 会津若松大火、一六九〇戸焼失。〔福島県災害誌〕

6・19 幕府、江戸湯島鋳砲場にて洋式小銃の製作を行うことに決定。諸藩の需要に応ずることにする。〔村垣範正日記〕

「西洋流砲術追々相開け、調練も次第に習熟いたすべく、一段のことに候。然るところ右筒打立て候職業のもの、多分にこれなく候間、自然手重に相成り、その余、誂へ候向より前金を貪り取り候上、張立て相納めざる者などもこれあるやに相聞き候。これにより諸家そのほか一同のため、向後湯島馬場大筒鋳立て場において西洋流小銃をも製造仰せ付けられ、向々より相願ひ次第、張立ての上御渡し相成るべく候間、所望の向はかねて筒銘、挺数等取調べ、松平河内守、岩瀬修理、村垣与三郎まで差出すべく候。」 〔勝海舟『陸軍歴史』〕

6・19 陸奥国大暴風雨、大川洪水。〔会津年表〕

是夏 江差地方の漁民、徒党して西蝦夷地に入り、鰊大網を切断しつつ積丹半島に到り建網の全廃を強訴する。〔笊網騒擾顚末〕

5月 記」「切子曙」上演。〔歌舞伎年表〕

捕鯨図絵馬〔奉銘—香川県・讃岐金刀比羅宮〕

5月 狩野清信筆「金毘羅祭礼図屏風絵馬」〔銘—香川県・讃岐金刀比羅宮〕

6・5（7・18） 幕府、蛮書翻訳御用掛を設置し、筒井政憲・水野忠徳・岩瀬忠震・川路聖謨を任命する。〔川路聖謨『蕃書調所立会御用留』〕

6・17 〔詩人〕菊池五山(84)歿す。〔関八州名墓誌〕

6・23 〔国学者〕色川三中(55)歿す。〔国学者伝記集成〕

6・28 〔歌人〕中島棕隠(77)歿す。〔名人忌辰録〕

6月 近江水口藩、藩校翼輪堂を創設する。〔旧水口藩学制沿革取調書〕

6月 名古屋・若宮芝居、「薫伽羅」「浮名横櫛」、和歌山・建貸芝居、「二葉絵双紙」「恋湊」上演。〔歌舞伎年表〕

指標	政治・経済	社会	文化
	ひ申すまじく候。仍ては二・三・四一同表発は今日の上策、右が御六ヶ敷く候はば、二は古老の廉にて先づ御居置き、三・四は是非御決断これ有りたし。」〔懐旧紀事〕 佐賀藩・福岡藩、オランダ船で航海術学習のため各藩士を長崎に派遣する。〔佐賀藩海軍史・鍋島直正譜略〕		
＊牧場設置を建議	**6月**		
＊国産最初の汽船	**7・3（8・15）** イギリス軍艦ターター、箱館に入港。**4** 出港。**6** イギリス軍艦バラコータ、箱館入港して出港する。**16** イギリス軍艦エンコントル、箱館入港。**17** 同シビルとホルネット、**19** 同バルタンが箱館入港。**20** アメリカ商船ウィルミントン号、**29** フランス軍艦コンスタンチーヌ、箱館入港。〔幕末外国関係文書〕 鹿児島藩、蒸気機関を完成。**8・23** 鹿児島から江戸に運んだ長さ九間・幅一間五尺の船に取付け、試運転に成功。〈運行丸〉と命名。国産最初の汽船。〔斉彬公史料・薩藩海軍史〕		
	7・13 イギリス船一艘、**15** フランス船一艘、久春古丹に入港。**20** ともに出港する。〔幕末外国関係文書〕		
	7・17 幕府、組番衆らに鹿児島藩献上の大型帆船〈昌平丸〉と君沢型大船にて近海乗試・運用・大砲調練・航海術の練習を許可する。〔勝海舟『海軍歴史』〕		
	7・26 佐賀藩の運送船〈順勢丸〉、幕府の命により鋳造した砲八門を積んだまま紀州沖で暴風にあい沈没する。〔佐賀藩海軍史・村垣範正日記〕		
＊国産最初の成層砲	**7・26** 熊本藩、町人増永三左衛門の指導により二四ポンドの入子砲二門を製作・試射する。国産最初の成層砲。〔増永家文書〕		
＊西洋式銃陣訓練	**7・27** オランダ商館長兼領事クルチウス、長崎奉行に条約草案を送り締結を要請する。**9・30** 長崎奉行荒尾成允・川村修就・目付浅野一学、クルチウスと通商条約に関する予備約定に調印する。〔幕末外国関係文書〕→【12・23】	**7・14（8・26）** 土佐で大風雨・洪水。〔日本災異志〕 **7・22** 箱館奉行、外国人の牛肉請求に応じられるよう蝦夷地に牧場を設置することを幕府に建議する。〔福田作太郎筆記〕 **7・28** 〔津軽藩世子〕津軽承祐、歿す。近侍の大谷津岩五郎・館山源右衛門が殉死する。〔津軽旧記類〕 **7月** 信濃・尾張・駿河・伊予・豊後など大風雨。被害多し。〔松代藩日記・臼杵藩記録・日本災異誌〕 南の方に、月下に白気が現れる。「十一日、夜四時、殊に鮮かなり。」〔増訂武江年表〕 **7・29** 【海軍創設】 海軍御創制は容易ならざる大業に候処、永井岩之丞今般阿蘭陀献貢の蒸気船を以て運用し其外伝習方の儀は、彼国王に於て格別の心入にこれ有り。悉く伝習研究致し度く、就ては其方儀、暫の在勤大儀に候へ共、交代相済み候はゞ、猶ほ此上滞留罷り在り。右運用其外、伝習のため遣はされ候者共の指揮且掛引等すべての進退取締方引請け取扱ひ申すべし。〔阿部正弘事蹟〕 **7月** 幕府、与力・同心らに西洋式銃陣の訓練をするよう命ずる。 「近来、異国船度々渡来については、御備向別し	**7・2（8・14）** 老中牧野忠雅・同松平忠優ら、浜庭でオランダから寄贈された電信機などを見る。**13** 老中阿部正弘・同久世広周らも浜庭で電信機を見る。〔村垣範正日記・本多忠徳雑録〕 **7・5** 〔講談師〕二世伊東燕凌(56)歿す。〔関八州名墓誌〕 **7・14** 〔歌舞伎役者〕瀬川路山(40)歿す。〔歌舞伎年表〕 **7・19** 〔茶湯者〕吉村貫阿(84)歿す。〔増訂武江年表〕 **7・27** 江戸・河原崎座、「蝶衛亀山染」「袖浦故郷錦」初日。〔歌舞伎年表〕 **7月** 名古屋・若宮芝居、「つづれ錦」「お染久松」上演。〔歌舞伎年表〕

＊海軍伝習所設置

7・29 長崎奉行所西役所に海軍伝習所を設置する。〔懐旧紀事〕

7・29 幕府、長崎奉行永井尚志（岩之丞・玄蕃）を海軍伝習所の所長とし、勝義邦（麟太郎）らに長崎での海軍伝習を命ずる。〔勝海舟『海軍歴史』〕

7・29 （鳥取藩支藩西館藩士）八尾徳右衛門(69)歿す。

＊船打ち砲術

8・4（9・14） 幕府、老中松平乗全・松平忠固（忠優）を罷免する。〔安政年録〕

8・4 将軍、浜御殿で江川太郎左衛門（英敏）指揮の船打ち砲術を見る。〔安政年録〕

8・7 将軍、江戸城内で馬揃を見る。〔続々泰平年表〕

8・7 幕府、行政改革の大綱を布告する。〔高麗環雑記・安政録〕

8・10 幕府、浦賀奉行組与力中島三郎助ら四十五名に、海軍諸科伝習のため長崎派遣を命ずる。〔村垣範正日記・小野友五郎日記〕

＊蒸気車模型の始め

8・13 幕府、諸大名にアメリカ・ロシア・イギリスとの和親条約書の写しを示し内容を知らせる。〔井伊家史料〕

8・13 幕府、鹿児島藩より砲艦〈昇平丸〉の寄贈を受ける。〔安政年録〕

＊米の素人直売買を禁止

8・14 幕府、徳川斉昭に再び幕政参与を命ずる。〔水戸藩史料〕

＊蒸気船スンビン、オランダより贈られる

8・25 長崎奉行ら、オランダ国王寄贈の蒸気船スンビン（のち観光丸）を受領する。

「蒸気外車・百五十馬力・砲六門・長さ二十九間・幅五間〔のちに軍艦観光〕乗組員は水夫小頭三人・同格帆縫二人・平水夫五十五人・火焚小頭四人・平火焚十二人合計七十六人。給与は水夫小頭と帆縫は一人につき一年三十両、平水夫二十五両、火焚小頭三十三両、平火焚三十両、米はいずれも一人につき一日一升を支給。一年間の合計金二千十七両、米二百七十三石六斗。」〔勝海舟『海軍歴史』〕

＊日英和親条約本

8・28 イギリス艦隊司令官スターリング、長崎奉行に英女王よて厳重にこれなく候ては相成りがたく、然るところ夷狄防禦の儀は、既に銃陣専要の儀につき与力・同心ならびに御徒等、西洋銃陣修行いたすべき旨、仰せ出され候。」〔勝海舟『陸軍歴史』〕

8・17（9・27） 出羽国諏訪大明神に正一位を授ける。〔神階抄〕

8・20 近畿・東海地方大暴風雨。〔脇坂安宅日記・青窓紀聞など〕

8・22 鹿児島藩、国産初の蒸気外車船〈雲行丸〉長さ九間・幅一間半・品川沖で試運転に成功する。〔竪山利武公用控・薩藩海軍史・日本近世造船史〕

8・23 幕府、定火消十組のうち小川町と六番町との二組を減じて八組とする。〔嘉永明治年間録〕

8月 佐賀藩、日本初めての蒸気車模型を製作する。〔日本国有鉄道百年史〕

8月 佐賀藩、白石・川副両郷の新田干拓を始める。〔鍋島家文書〕

8月 幕府、米の素人直売買を禁止する。

「去る亥年〔嘉永四年〕問屋組合再興申し渡し、素人直売買相成らざる旨、触れ置き候につきては、米穀は猶ほ更の儀にこれ有る処、素人ども、在方荷主え直に引合ひ、玄米雑穀等、勝手次第売り散らし候者これ有る由、右は再興以前の仕癖相止まざる儀と相聞こえ、入津高取調べにも洩れ、相場の障りにも相成り候。」〔米商法調〕

8・4（9・14） 天文方山路諧孝父子、テレガラフ使用御用掛となり、浜御苑に器機を設置して電信の実験を行う。〔新撰洋学年表〕

8・12 幕府、箕作阮甫に洋学所勤務を命ずる。〔津山藩記録〕

8・13 （画家）沖一峨(60)歿す。〔東京美術家墓所誌〕

8・14 長崎奉行、海軍伝習所の教科書作製のため長崎西役所に活字板摺立所を設置し、蘭字の活字銅板の輸入をはかる。〔長崎往来〕

8・19 鹿児島藩、蘭学など勉学したい若者を五人まとめて募集する。

「蘭学ならびに学問稽古いたしたき者は、五人ばかりづつ差し登され候様、国元え申すべき趣旨仰せ付けられ候。」**翌年・6・23** 五人揃わなくてもよいこととする。〔竪山利武公用控〕

8月 蕃書翻訳掛小田文蔵、オランダから贈呈された電信機の取扱・設置法および電池の製法を学び、将軍家定の前で実験を行う。〔日本洋学編年史〕

8月 大坂・中の芝居、「音聞韓曲者」「鯉つかみ」、角の芝居、「亀山」上演。〔歌舞伎年表〕

指標	政治・経済	社会	文化
書批准交換	り蒸気船を幕府に寄贈することを告げ、29日英和親条約本書の批准交換を行う。9・10退去する。〔英吉利条約和解一綴・長崎往来〕 8・29 鳥取藩支藩西館藩用人八尾正明(49)、主君池田清直が遊逸して国事に努力しないので「吾れ重職にありて主の非行を正す能はざるは瀆職なり。昧死を以てその職を尽くさざるべからず」との遺書を残して諫死する。〔足立正声『元島取藩殉難死節徒履歴』〕 9・1(10・11) 村田蔵六設計の洋式軍艦模型が完成し、伊予九島浦で試運転を行う。〔伊達宗城日記・大村益次郎先生伝〕 9・18 京都所司代、朝廷に外国との条約締結に関する事情を報告する。〔久我建通日記〕 9・18 京都所司代脇坂安宅、朝廷に米英露和親条約謄本を提出し、その間の事情を説明する。22関白、幕府の措置を了承する朝旨を伝える。〔脇坂安宅日記〕 9・27 フランス軍艦ウィルジニー・シビル・コルベール、琉球那覇に来航する。10・1フランス艦隊司令官ゲラン、総理官本部按司景保・布政官棚原親方良才らと会談。ゲラン、通商条約の締結を要請。15琉球・フランス和親条約十一款を締結する。19フランス軍艦三艘、出港する。〔琉球評定所記録〕 9・28 幕府、一万石以下の者に拝借金の返納を免除し、西洋式銃砲の準備を命ずる。 「方今西洋大小炮は軽便の利器につき厚く御世話もこれ有る事に候間、小筒または大炮など、これまでいまだ用意されなき向々、追々分限に応じ、相嗜むべく候。」〔御書付留〕 9月 遠江浜松藩領諸村で、神主の弓隊が結成される。〔高林文書〕	9・10(10・20) 出羽国荒倉大権現に正一位を授ける。〔神階抄〕 9・15 神田明神祭礼。神輿・山車・練物など江戸城中には入らず産子の町々を通る。「車楽邃物は当日例の通り御茶の水土手へ集り、桜の馬場神田社前より三河町一丁目迄は例の通りなり。神輿計は行列を整へ、神田橋を入り、古例の如く酒井侯屋敷前大手御橋の上にて奉幣あり。それより元の通り神田橋を出、新規道筋になり鎌倉河岸龍閑橋を渡り、本銀町一丁目、本石町一丁目、本町一丁目、壕塹に添ひて、本町一丁目二丁目三丁目より、例の道筋、小網町、南伝馬町仮屋より京橋迄、それより帰輿、道筋先例の如く、車楽ねりものは神田橋へ入らず、三河町一丁目より神輿と同じく龍閑橋を渡り、本町へ出て同町三丁目より思ひ思ひに退散す。夜五時〔午後七時〕に神輿帰社あり。」〔増訂武江年表〕 9・15 相模神奈川宿の百姓竹松(47)、病死。翌日に同宿の慶雲寺に埋葬したが、十八日に掘り出されて首がなくなっていた。その夜、下総行徳の農家に賊が入り、騒がれて逃走したが、竹松の首入りの包みが残されていた。〔真佐喜のかつら〕 9・15 皆既月食。〔増訂武江年表〕	9・9(10・19) 江戸・市村座、「木下蔭硯伊達染」「菊競艶相駕」初日。〔歌舞伎年表〕 9・13 (歌舞伎役者)大谷広右衛門(52)歿す。〔歌舞伎年表〕 9・26 (清元節大夫)二世清元延寿太夫(54)歿す。〔増訂武江年表〕 9月 大坂・若大夫芝居、「輝双紙」「大功記」、堺芝居、「千両幟」上演。〔歌舞伎年表〕 式三番叟図絵馬〔奉納銘—両津市・熱田神宮〕

＊西洋式銃砲準備

＊安政大地震

10・2（11・11） 水戸藩家老戸田蓬軒・側用人兼学校奉行藤田東湖(50)らが地震により圧死する。〔故老実歴水戸史談〕

「三たび死を決して死せず。二十五回刀水（危地）を渡る。五たび閑地（隠退）を乞ひて閑を得ず。三十九年七処に徒る。」〔藤田東湖『回天詩史』〕

「大地俄に鳴動す。家潰るゝ事夥しく、老若男女の死亡数知らず。此時八方より猛火災々と燃上り是が為に人命を絶事夥し。御府内市中の人民、一瞬のうちに命を失ふもの数万人、実に前代未聞の怪談なり。」〔江戸大地震末代噺之種〕

「町会所より日々野宿の貧民へ握飯を与へられ、また御救の小屋を所々に建て養はる。富人もまた色々の施しを行へり。」「地震の後、酒肆食店、商ひ甚だ少し。絃歌鼓吹街に絶えたり。」〔増訂武江年表〕

＊大坂町奉行、便乗値上げ禁止

10・8 大坂町奉行、江戸大地震の報が大坂に伝わったので便乗値上げを禁止、物価引下げを命ずる。

「去る二日、江戸表地震後、大火の由相聞こえ候につきては、当地商人共儀、兼ねて江戸積仕来り候品々は勿論の儀、その余の諸品とも、右に事寄せ直段引上げ候儀など、決していたすまじく候。自然利慾に拘はり不直の仕方に及び候者これ有る趣相聞こえ候はば、早速召捕へ厳重に沙汰せしむべき条、一統その旨を存じ、弥々以て正路の取り計ひいたすべく候。」〔堂島旧記〕

＊薩摩切子の始め

10・9 幕府、佐倉藩主堀田正篤（正睦）を老中に再任首座とする。〔安政年録・堀田正睦国事勤労明細書〕

＊蝦夷地移住許可

10・14 幕府、旗本および諸藩士・百姓・町人の蝦夷地移住を許可し、給資開拓を命ずる。〔蝦夷地開拓書類〕

「荒地開発、野馬野牛牧養を始めとして、食料薬用に充すべき生類育て方、金銀銅銑鉄類鉛・山間掘り、巨材薪柴伐り出し、草木類植え付け、石炭掘り取り、器具製造、採薬鯨猟、いづれに限らず生産に相成り候類ならびに湊附などの場所え休泊所・茶店など取り建てたく存じ候者

10・2（11・11） 安政大地震。江戸大地震、余震八十余回。火災が江戸府内各地に起こる。江戸城・諸大名邸・民家・社寺の被害甚大。倒壊一万四千戸。死者七千余人。〔安政乙卯武江地動之記・安政二卯年地震災害書留・増訂武江年表・安政見聞誌・御救小屋施行名前附〕

「二日夜四ッ時、江戸大地震につき出火、最初四十二口、そのうち大火の分廿壱か所、その後三拾六か町、夜八ッ時頃廿六か所、明方拾五か所の由。その後、亀の尾にて市中取締り掛の調べは五捨八か所の由。地震の前に光りもの北より南へ飛び候由。その節浅草観音五重の塔九輪傾き候よし。火事最初は吉原にて四か所より出火の由。

一、震り返し三日の夜四ッ時、大地震これ有り候とて神田明神の御託宣御湯立てにてこれ有りとの風聞にて近辺の者、皆々加賀原広小路へ野宿いたし夜を明かすなり。

一、五日夜、海鳴り候につき、津浪入り候とて、海辺の者、皆々高見へ逃げ候由。両国辺の者は神田明神の山へ逃げ候よし。

十月二日夜地震の節町方計。

一、即死人三千八百九十五人。内、男千六百十六人・女二千二百七十九人。

一、潰家壱万四千三百四十三軒。但千七百二十四棟。

一、潰土蔵千四百四十戸前。

右十二日まで書上高、右の外いづれの者とも相分からざるもこれ有る由。」〔藤岡屋日記〕→【文化】

10・6 幕府、牢屋敷が倒壊したので、咎・手鎖などの軽囚を臨時に釈放する。〔地震一件〕

10・10 朝廷、七社七寺に勅して災異を祈禱させる。〔橘本実麗日記〕

10・10 幕府、震災被害者に諸貸付金の返納延期を許可。つ

10・2（11・11） （講談師）初世松林伯円(44)歿す。〔関八州名墓誌〕

10・2 江戸大地震のため、猿若町三芝居座、茶屋、役者宅みな焼失する。〔歌舞伎年表〕

「浅草なる猿若街も悉く震潰し、火さえ出て焼野とはなれり。去年の類焼やうやくに建揃ひたる間もなきに、江戸に稀なる地震にてたつきなく、俳優共は皆難波、仙台、名護屋、甲州等のぼり行しとかや。二町目なる市村座計、表のみ建て櫓は上しといえ共、内造作に及びがたしとぞ。」〔巷街贅説〕

10・4 （歌人）本居内遠(64)歿す。〔芸文家墓所誌〕

10・8 鹿児島藩、ガラス師四本亀次郎を招き、集成館でガラス器の製造を始める。〔新納久仰譜〕〔一説には**翌年**→斉彬公御言行録〕薩摩切子の始め。

10・14 （劇作家）三世並木五瓶(67)歿す。〔歌舞伎年表〕

10月 大坂・中の芝居（座元藤川花松）、「花絵合」、京都・南側芝居、顔見世「薄雪」「傾城芋源氏」、北側芝居、顔見世「厳流島」「彫刻左小刀」上演。〔歌舞伎年表〕

10・2 【地震の御救小屋場所】

一、幸橋御門明地。一、深川永代寺八幡社地。

一、同海辺大工町。一、浅草広小

指標	政治・経済	社会	文化
	は、望みに任せ差し遣はさる、もつともその品に応じ、御手当も下さるべく候。」〔御書付留〕	いで貸付周旋と称して不正を行う者に警告を与える。〔地震一件〕	路。 一、上野山下火除明地。 一、同山内一か所、これは宮様御救小屋と曰ふ。 御手当施行、下し置かる。年の内に皆々引取りて、浅草観音歳の市の頃は、小屋々々も取払ひしとぞ。〔巷街贅説〕
＊琉仏和親条約	**10・15** 琉球中山府にてフランス艦隊司令官ゲラン、銃剣で琉球官吏をおどし、琉仏和親条約十一か条を締結する。〔琉球評定所記録〕	**10・17** 幕府、蝦夷地開拓の希望者を募る。蝦夷地開拓につき武士・浪人・百姓・町人の移住を許可する。〔嘉永明治年間録〕 **11月** 京都でも募る。〔正行院文書〕	
＊蝦夷地開拓の希望者を募る		**10・21** 幕府、諸官吏の旅行の服装などを簡略化するよう通達する。〔嘉永明治年間録〕	
		10月 幕府、震災による物価・工賃の値上げ防止に関する命令を再々にわたり出す。〔震災動揺集〕	
＊第一次海軍伝習	**10・24～安政6・1月** 幕府、長崎において第一次海軍伝習を開始する。伝習所は長崎奉行西役所。伝習生取締永井尚志（玄蕃頭）。教官オランダ人ペルス＝ライケンら、伝習生は矢田堀景蔵（鴻）・勝麟太郎・幕臣三十七名、大工職二名、諸藩の有士一二九名。〔勝海舟『海軍歴史』・長崎医学百年史〕	**10～11月** 「駒込・巣鴨の辺に夜中刃物をもつて女の臀を刺すものあり。十一月上旬に至りて止む。」〔増訂武江年表〕	
＊内裏完成	**11・2（12・10）** 新造の内裏が完成（現在の紫宸殿、清涼殿など。総費用五十万両。うち幕府が十万五千両、加賀藩十五万両、その他高松藩・阿波藩・彦根藩など十四大名が二十五万両を負担する）。**23** 天皇・遷幸される。〔非蔵人日記・脇坂安宅日記・安政遷幸一会記〕	**11・3（12・11）** 江戸赤坂田町の料理茶屋、隠売女の媒介をしたので召捕えられ、十二月御叱りにて落着。〔増訂武江年表〕	**11・3（12・11）** （画家）立原春沙(41)歿す。〔東京美術家墓所誌〕
	11・23 幕府、箱館奉行の願により蝦夷離島備米として出羽・越後両国から廻米して択捉に六百七十五石、国後に三百八十石、北蝦夷地に四百四十五石、計一千五百石を置くことを許可する。〔幕末外国関係文書〕	**11・5** 幕府、震災による江戸市中の流言を取締る。〔川路聖謨文書〕	**11・30** （音曲家）四世杵屋六三郎(77)歿す。〔名人忌辰録〕
	11・26 水戸那珂湊の反射炉火入れが行われる。〔反射炉日録抄出〕	**11・7** 幕府、地震・金銭などの浮説が衆人に疑惑を生じさせるので禁止する。〔安政年録〕	**11月** 大坂・角の芝居（座元市川てる代）、「生写朝顔話」「国姓爺」「源平つつじ」、若大夫芝居、「木下蔭」「重井筒」上演。〔歌舞伎年表〕
	11・30 幕府、諸大名が家臣などを適宜国元に帰らせ、また万石以下の者にも同様にするよう通達する。〔御書付留・安政録〕	**11・7** 幕府、古金銀貨の引替を増歩手当により奨励する。	
		11・16 震災による焼損金銀具の買上げを命じ、また金銀具および金箔類を神仏および装具に使用することを禁止する。〔若年寄手留・安政年録〕	**11月** 『豆州下田港図』刊〔年記―東京大屋書房〕
＊豊前宇佐・下毛郡、時枝藩一揆	**11月** 幕府、オランダに製鉄所用の設備を注文する。「当年出帆の商船へ、左の通り誂へ遣はし、明年持ち渡り候様相達す。一、蒸気機械湯釜	**11・19** 秋田藩、職人・奉公人などの公定賃金を定める。〔町触控〕	
		豊前宇佐・下毛郡秣村などの十四か村の旗本領農民、重課に反対して一揆。元野村庄屋宅を打ちこわし、時枝藩陣屋に押しかける。小倉・中津藩兵が出動して鎮圧する。〔時枝百姓騒動一件・中津奥平家譜〕	

一、伝習御用必需の品
一、鎔鉄炉附属の蒸気機械類ならびに鉄槌等、代およそ一万金ほど
追っては御都城近きの場所〔江戸近辺〕へ差し置き候方、然るべく候へども当地滞在の蘭人どもへ質問伝習候については、さしむき当地へ御取建の方、然るべく云々。

覚
第一　蒸気鎚（ストームハームル）蒸気罐附属一具
第二　右蒸気槌のために設くる熔炉二個諸要品
第三　台附プレットロル（銅鉄竿板製造機）六個（車輪ならびに運転機等全備）
第四　竿鉄製作用二個・鉄板製作用二個・銅板製作用二個
第五　鉄具煉火竈（大装置）、輪風器等全備
第六　木材鋸断装置スレーデおよび運転機附属全備
第七　蒸気罐附属全備の蒸気器械一具
第八　最大砥石一具、運転機附属　以上

〔勝海舟『海軍歴史』〕

＊地球儀

＊日蘭和親条約
＊蒟蒻会所定

＊三池大ノ浦炭鉱
洋式斜鉱

12・2（1・9）〔前内大臣〕久我通明(76)歿す。〔公卿補任〕

12・4　老中阿部正弘、評定所一座に諸国産物会所の設置を提案する。意見の一致を見ずに廃案となる。〔維新史〕

12・4　幕府、松前藩から蝦夷地一円上知。その替地として陸奥伊達郡梁川・出羽村山郡東根に三万石を与え、出羽尾花沢一万石を預地とする。また毎年一万八千両を支給することとする。〔松前家記〕

12・23　日蘭和親条約二十七条、長崎にて長崎奉行荒尾成允・同川村修就とオランダ理事官クルチウスとが調印する。**安政4・8・29**　批准書交換。
「第一条　和蘭国民へ是迄差許候場所へ、警固人これ無く出島より出行候儀、勝手次第たるべき事
第二条　和蘭人、日本の掟を犯し候はば、出島在留高官の者へ知らせ申すべく候、左候へは同人をして和

11・23　江戸両国橋の修復なる。〔増訂武江年表〕

12・2（1・9）　江戸の切支丹坂火事。〔増訂武江年表〕

12・7、20　江戸降雪。「地震後、仮の繕ひしたる家々、小屋がけ野宿の賤民、その困苦いふばかりなしとぞ。」〔増訂武江年表〕

12・8　江戸八丁堀水谷町一丁目から出火。長さ一町、幅五十間ほど焼失する。〔増訂武江年表〕

12・10　〔剣術家〕千葉周作(62)歿す。〔増訂武江年表〕

12・21　上野国赤城二宮神社に正一位を授ける。〔神階抄〕

12月　常陸の蒟蒻会所定できる。〔大子町桜岡家文書〕

12月　江戸吉原の仮宅は五百日間の営業が許可される。

12月　「元地の家作は、翌辰年より巳年へかけ、同年六月迄に成就して各徙移せり。」〔増訂武江年表〕
三池大ノ浦炭鉱で、洋式斜鉱を開掘する。〔日本鉱業発達史〕

12・11（1・18）　井伊直弼、江戸の茶室に若狭小浜城主酒井忠義・幕府の数寄屋頭格谷村可順・栄徳・三悦らを招き茶会を催す。〔井伊直弼『東都水屋帳』〕

12月　江戸の歌舞伎役者、多く京都・大坂へ赴く。〔歌舞伎年表〕

是年
○　上野安中藩士岩井友之丞、五料村に安中郷学校を創設する。〔日本教育史資料〕
○　沼尻墨僊製作「傘式地球儀・同版木」〔同説明書—茨城県・本間隆雄氏〕
○　宇佐神宮本殿できる。〔小山田家文書〕**大正6年**　解体修理。

是年の刊行
長沼広敬（宗敬）『兵要録』刊
荻生徂徠『鈐録』刊
三浦梅園『梅園叢書』刊
山崎美成『赤穂義士随筆』刊
政田美彦『浪速人傑談』刊
松岡御調『斎明紀童揺弁』刊
八田知紀『しのぶ草』刊
千種有功『千千廼舎集』刊
森源愿編『雅俗幼学新書』刊
長沢伴雄『挫夷本論』刊
山川大作『山陵考略』できる。
広瀬旭荘『九桂草堂随筆』できる。
赤松義知『利根川図志』刊
清宮秀堅『新撰年表』刊

指標	政治・経済	社会	文化
＊コールタール採取 ＊大砲鋳造 ＊江戸の寄席	蘭政府より其国法通戒め申すべき事 第三条　和蘭人、日本人より不都合の取扱を受候時は、日本に於ける和蘭領事官より其旨を訴へ、日本重役吟味の上、日本国法通戒め申すべき事」 〔和蘭条約一件・大橋宥之助筆記〕 **12・27**　北蝦夷地久春古丹に山旦人六人が到る。松前藩、来夏より白主へ来るように命ずる。〔幕末外国関係文書〕 **12月**　幕府、鹿児島藩より献上される軍艦〈昌平丸〉などに据付ける大砲の鋳造を佐賀藩に命ずる。 「松平薩摩守、国許に於て製造いたし候軍艦二艘、御用につき差出し候筈につき、右御船へ据付け候鉄製大砲、肥前守方にて引受け鋳造仰せ付けられ候間、その意を得、貫目、挺数等委細の儀は海防掛・御勘定奉行、同吟味役へ承合ひ候様仕るべきこと。」〔勝海舟『陸軍歴史』〕 **是年** ○　オランダ船二艘、唐船五艘、長崎に入港する。〔増補長崎略史〕 ○　箱館への外国船入港数。軍艦十四隻。イギリス十隻・フランス四隻。商船四十三隻。アメリカ二十隻・イギリス十八隻・フランス二隻・プロシア一隻・ロシア一隻・不明一隻。〔長万部村平沢豊作日記〕	**是年** ○　磐城国の片寄平蔵、陸奥国磐城郡白水に北部炭田を発見する。〔常磐炭田史〕石炭乾溜窯二基を設置、コールタールを採取し、江戸に送り船舶の防蝕塗料として販売。〔日本のコークス炉変遷史〕 ○　鹿児島藩、外輪蒸気船〈雲行丸〉を建造。この時最初の蒸気機関（十五馬力）を製作。〔薩藩海軍史〕 ○　備前勝山藩、城内に西洋流剣筒細工所を開設、安政四年までに小銃三十挺を完成する。〔岡山県史〕 **此頃** 江戸の寄席。軍談の席二百二十軒、落語の席一七二、各席百人ならし、席料一人前四十八文。〔大江戸都会荒増日勘定〕	国友当栄『国朝砲煩権輿録』刊 間宮倫宗（林蔵）『北蝦夷図説』刊 山東京伝『歴世女装考』刊 青山幸哉『西洋度量考』刊 大槻恒輔『遠西紀略』できる。漢文による世界史。 中居義倚『砲薬新書』できる。 桑本正明『算法尖円豁通』刊 剣持章行『量地円起方成後編』刊 村上英俊『洋学捷径仏英訓弁』刊 吉雄権之助訳・桂川甫周校『和蘭字彙』～**安政5年**刊 大庭雪斎『訳和蘭文語』できる。 榊令輔『露西亜字筌』できる。 永井助吉『泰西三才正蒙』できる。 田内梅軒『陶器考』刊 菊名助之『飼馬必用』刊 梅沢敬典『消息往来』刊 （合巻）二世為永春水『北雪美談時代加賀見』～**明治16年**刊 柳下亭種員ら『童謡妙々車』～**明治4年**刊

1856

新暦1・1=2・6

安政3年（あんせい）

丙辰（ひのえたつ）

皇紀2516年

【中国】清・咸豐6年

【朝鮮】哲宗7年

陰暦月の大小、閏月、毎月1日の干支

1月大己未
2月小己丑
3月小戊午
4月大丁亥
5月小丁巳
6月大丙戌
7月小丙辰
8月大乙酉
9月大乙卯
10月大乙酉
11月小乙卯
12月大甲申

【天皇】孝明

【先皇】

【関白】九条尚忠

【武家伝奏】三条実万・東坊城聡長

【将軍】徳川家定

【老中】阿部正弘・久世広周・内藤信親・堀田正篤（正睦）【京都所司代】脇坂安宅

【大坂城代】土屋寅直【江戸町奉行】井戸覚弘（～11・18）・池田頼方・跡部良弼（11・18～）

指標

＊将軍通行規定

＊鹿児島藩、水軍隊創設

＊大塚調練所

＊ゲベール小銃支給

＊蕃書調所

＊雛人形などの華美禁止

＊合薬座を設置

政治・経済

1・12（2・17） アメリカ漁船、鹿児島へ渡航中に漂難した琉球の使者渡名喜親方（となき）らを救助して那覇へ入港。14退去する。〔琉球評定所記録〕

1・29 越前大野藩、箱館奉行に蝦夷地開拓のための移住を願出る。〔幕末外国関係文書〕

1月 鹿児島藩、水軍隊を創設する。城下士小番・新番・御小姓組から兵士を募集する。応募者は小番十九人・新番四人・御小姓組一五四人、計一七七人。手当は年切米四石と別に賄料を定める。**安政6・2月**廃止となる。〔薩藩海軍史・斉彬公史料・市来四郎自叙伝〕

2・10（3・16） （福井藩重臣・儒者）鈴木主税（すずきちから）(43)歿す。〔越前人物志〕

2・17 幕府、大塚調練所を完成する。〔触留〕

2・19 幕府、海防掛にゲベール小銃を支給する。〔村垣範正日記〕

2・27 アメリカ捕鯨船、安房南朝夷村沖の海上で摂津の漂流民十六人を日本の漁船に移乗させて去る。〔岡山藩房総警備〕

2・28 幕府、合薬座（ごうやくざ）を設置し、硝薬を無許可で販売することを

社会

1・23（2・28） 幕府、将軍通行の際に通路に面した戸・窓を閉める規定を廃止する。〔安政年録〕

「阿部伊勢守殿渡書付　芝上野両山へ御参詣の節、前々より窓蓋（まどぶた）仕り候得（かまつそうらえ）ども以来ハ御鷹野その外御成（おなり）の節共、窓蓋仕り候にハ及ばず候間。簾の有内より戸を建置候様致さるべく候。右之趣、諸向へ達せらる。」〔嘉永明治年間録〕

1・28 新発田藩足軽飯島畢平（いいじまかずひら）、助太刀の榎本周吾（えのもと）とともに母の仇飯島惣吉（いいじまそうきち）を常陸府中で討つ。**3・24**新発田藩、二人を賞して士分に取立てる。〔新発田藩史料〕

2・2（3・8） 三十三年目ごとに催される上野護国院の七万日念仏会の最終日。参詣人多数でる。〔増訂武江年表〕

2・13 江戸府下内藤新宿裏手の玉川上水土手に桜七十五本が植えられる。秋には浅草寺にも植えられる。立札「御用木折り取るべからず。」〔藤岡屋日記〕

2・15 幕府、旗本に雛人形などを華美に飾ることを禁止する。〔温恭院殿御実紀〕

文化

1・2（2・7） （画家）山本梅逸（やまもとばいいつ）(74)歿す。〔芸文家墓所誌〕

1・11 幕府連歌会。

千代の声つたへて久し松の春　昌固
霧む雲井にあそぶ友鶴　内大臣殿
住みなるゝ山人の声長閑にて　通良

〔巷街贅説〕

1・17 （書家）生方鼎斎（うぶかたていさい）(58)、酒狂人金子武士郎に斬殺される。〔増訂武江年表〕

1・24 朝廷、歌会始。〔非蔵人日記・近衛忠熙日記〕

1月 清宮秀堅『新撰年表』刊。（和・漢・洋の対照年表）

1月 狩野芳崖（かのうほうがい）筆「繋馬図絵馬」〔銘—下関市・忌宮神社〕

2・7（3・13） （蒔絵師）小林仙次郎（こばやしせんじろう）(54)歿す。〔芸文家墓所誌〕

2・11 洋学所を蕃書調所と改称。天文方の翻訳事業も引継ぐ。洋学の教育・翻訳・統制にあたる。**3・11**目付大久保忠寛（おおくぼただひろ）、蕃書調所掛となる。〔蕃書調所立会御用留・安政年録・続々泰平年表〕

安政二年「村上家乗」参考資料（令和元・5・11）2

① 十干と十二支

十干（五行説…万物は火・水・木・金・土の五種類の元素からなる）

木（キ）		火（ひ）		土（つち）		金（か）		水（みず）	
兄（え）	弟（と）	兄（え）	弟（と）	兄（え）	弟（と）	兄（え）	弟（と）	兄（え）	弟（と）
甲（コウ）	乙（オツ）	丙（ヘイ）	丁（テイ）	戊（ボ）	己（キ）	庚（コウ）	辛（シン）	壬（ジン）	癸（キ）

十二支

子（シ）	丑（チュウ）	寅（イン）	卯（ボウ）	辰（シン）	巳（シ）	午（ゴ）	未（ビ）	申（シン）	酉（ユウ）	戌（ジュツ）	亥（ガイ）
ね	うし	とら	う	たつ	み	うま	ひつじ	さる	とり	いぬ	い

② **たいさい** 大歳　木星の別名を歳星といい、その精を大歳（太歳とも書く）とし、神格化して大歳神という。暦の首部に記載される八将神の一つである。『暦例』に「大歳者、歳星之精、降二天地之間一、観二察万物一、臨二見八方一、故名二歳之君一、慎レ之者保、逆レ之者亡」とある。大歳神はその年の十二支に従って子の年には子の方位（北）、丑の年には丑の方位（北北東）、寅の年は寅の方位（北東東）、卯の年は卯の方位（東）というように巡り、十二年で一巡する。陰陽家は大歳神のある方位は最も吉方とし、この方に向かって凶事を犯してはならないとする。木の精ゆえ、ことにこの方に向かって木を伐ることを忌む。仮名暦では卯の年であれば「大さいうの方、此方にむかひて万よし、但木をきらす」と記載される。『簠簋（ほき）内伝』では牛頭（ごず）天王（暦の天道神）とその后頗梨采（はりさい）女（暦の歳徳神）の間に生まれた八王子の第一王子総光天王、本地（ほんじ）薬師如来を大歳神とする。牛頭天王とはインドの祇園精舎の守護神、元来行疫神で、その厄を免れるために祭ったのが祇園社である。　→歳星（さいせい）　（渡辺　敏夫）

②・③『国史大辞典』（吉川弘文館）

③ **としとくじん** 歳徳神　年徳・としとくさま・年神・正月さまともよばれ、一年の福徳を司る神で、その方角に向かってことを行えば万事大吉で、いかなる凶神も犯すことができないとされる。陰陽道では南海の娑竭羅（しゃがら）竜王の娘頗梨采女（はりさいじょ）で、牛頭（ごず）天王の妻となり、八将神の母である。「容顔美麗、忍辱慈悲之体」（『簠簋（ほき）内伝』）とされる。歳徳神の方位は年の十干によって決まるが、具注暦や仮名写暦では十干、一般の仮名版暦では十二支で表わされる。甲・己歳は東宮甲方（寅卯の間）、乙・庚歳は西宮庚方（申酉の間）、丙・辛歳は南宮丙方（巳午の間）、丁・壬歳は北宮壬方（亥子の間）、戊・癸歳は中宮戊方（巳午の間（丑・辰・未・戌とする説あり））。歳徳神は日本古来の年神・正月さまの信仰と混合されており、また素盞嗚（すさのお）尊の妃櫛稲田姫であるともされている。歳徳神の方位に向けて歳徳棚を設け、酒肴を捧げてこの神を家に招く。歳徳神の方位を歳徳の方（かた）、明（あけ）の方あるいは恵方（えほう）と称し、その方位の社寺に初詣することを恵方詣という。　→年神（としがみ）

参考文献　平田篤胤『玉襷』八（『新修平田篤胤全集』六）　（岡田　芳朗）

④ **【龍次】**リョウジ　多くは「龍集」とか「歳次」と使われる。「龍」は、歳星の意で木星をいう。「次」はヤド（宿）るの

⑥ **ひーひ**【霏霏】《形動タリ》①雨や雪などが、しきりに降るさま。*懐風藻-望雪〈紀古麻呂〉「落雪霏霏一嶺

意で、「集」も同じ意である。日本書紀においては「太歳」及び「歳次」と使われている。歳次は、日本語としては、ホシのヤドルと発音する。

吉野裕子氏の文「十二支考」によれば、『年の十二支は木星の運行に基づいている。約十二年で天を一周するこの木星は、一年に十二区画中の一区画を移行することになる。この木星の神霊化が「太歳」である。太歳の次（ヤド）るところ即ち太歳の居所の名がその年の十二支となるから、一九九五年が亥年というのは太歳が亥に在泊しているからである』。

『村上家乗　慶応二年　レポート集』（古文書解読同好会、二〇〇四・六・一七）

⑤ ㊐安政二年正月、當時嚴敷御省略年限中に屬するも、本年より初めて城中に於て賀新の禮を行はる、依て市中一般に賀新の禮を行ふ、然れども是時地震尚ほ息まず、三月十六日に至るまで、殆んど毎日強弱の地震あり、市民恐怖の念を抱きて、新年を迎へりと云ふ、

『広島市史』第三巻（大正十二年）

⑥・㉑『日本国語大辞典』（小学館）

白」＊明月記－元久二年二月三日「朝雪紛々、已後㊐晴、雪猶霏々」＊読本・椿説弓張月－前・五回「扇に風のあればにや、花霏々（ヒヒ）として散乱し」＊交隣須知－四・逍遙「霏々、ヒヒト アメカ フル」＊詩経－小雅・采薇「今我来思、雨雪霏霏」②物事が続いて絶えないさま。＊新編覆醬続集－四・五老詩并叙「談論霏霏消二遣煩痾一」＊洒落本・通言総籬－叙「彦国佳言を吐こと、鋸木屑（をがくず）の如く、霏々（ヒヒ）として絶ず」＊晉書－胡母輔之伝「吐二佳言一如二鋸木屑一、霏霏不レ絶、誠為二後進領袖一也」〔発音〕〈標ア〉〔ヒ〕、〈京ア〉〔ヒ〕、

802 【膕】肉（19画）リョウ（レフ）〈力渉切〉〔葉〕

【膕】字 俗【膋】字 文 篆 字義 ①秦代の祭りの名。冬至ののち、第三の戌の日に神々や祖先を祭る。周代では蜡という。〔左伝・僖五〕「虞不レ膕矣」②年の暮れ。陰暦十二月の別称。「膕月」③僧侶が得度してからの年数。〔伝灯録四〕「寿七十有八、膕三十有九」④もろ刃の剣。〔周礼・冬官・桃氏〕「桃氏為レ剣、膕広二寸有半寸」⑤膕月あるいは冬につくる塩漬け肉。「膕肉」

解字 形声。意符の肉（にく）と、音符の繼（ルーラフ）（狩りをする意＝獵（ラフ））とから成る。狩りをして百神をまつる祭りの意。

⑧ 634 【凝】14 ㋐(16) 當 ギョウ 蒸 ㊐ 日〔魚陵切〕〔牛餕切〕 蒸 ning

常用音訓 ギョウ／こる・こらす

文 篆 読み こらす・こる／和 こごる・しこる

字義 日①こる。こらす。㋐こおる。「凝冱」「凝固」類氷。㋑かたまる。かためる。むすぶ。「凝結」類堅・固。㋒集中する。一所にじっと集める。心を一つのことに集中する。「凝思」「凝眸」㋓とどこおる。一所にじっと停滞する。じっとして動かない。「凝滞」㋔とどまる。とどめる。類止。㋕むすぶ。霜となる。類結。②さむい。〔素問・五常政大論〕「其候凝粛」類寒。③きびしい。はげしい。きわめて。「凝寒」類厳。④なる。なす。〔礼・楽記〕「凝二是精粗之体一」類成。⑤さだまる。さだめる。〔書・皐陶謨〕「庶績其凝」類定。⑥ただしい。〔淮・兵略〕「典凝如レ冬」〔注〕「典常、凝正也」類正。⑦音調の緩やかで、伸びるさま。「凝笳」

日 たまりみず。淵などにたまって動かない水。止水。

和 ①こごる。「煮凝り」②しこる。「凝りが残る」

解字 形声。意符の冫（こおり）と、音符の疑（ギョウ）（とどまって動かない意）とから成る。氷がぴんと張って動かない、「こる」意。ひいて、一般に、固まる意に用いる。

古訓 （中古）カタシ・コゴル・コラス・コル・サダマル・サダム・ル・トドム・ナル・ヤム・ヨル （中世）カタシ・コゴル・コラス・コル・トドマル・ナル （近世）カタシ・カタマル・コゴル・コホリカタマル・コホル・コラス・コル・サダム・シヅカニス・シヅム・ツモル・トドマル・トドム・ナル・ムスブ・ムスボル

人名 こおる・こり

⑦・⑧『角川大字源』

㉑ しこ【矢壺・矢籠・尻籠】『名』①狩猟や軍陣に用いる矢の容器の一つ。ツヅラフジの蔓や竹で編んだ狩箙（かりえびら）の一種。＊名語記－六「やなぐひをしことなづく、如何」＊太平記－二六・楠正行最期事「人の解捨たる箙竹（えびら）尻籠（シコ）箙（やなぐひ）を掻抱く許取集て」＊義経記－五・義経吉野山を落ち給ふ事「若大衆の鉄漿黒なるが、へ略〉しこの矢、筈下りに負ひなして」＊大観本謡曲・俊成忠度「御最期の後、尻籠を見候へば、短冊の御座候」＊元和本下学集「尻籠 シコ」②江戸時代、飾りとして端手（はたて）を長く組み違えて作った塗箙（ぬりえび

②壺 矢〈貞丈雑記〉

ら）の一種。＊雑俳・住吉躍「はっておく・尻籠の矢そへて棟の弓」＊随筆・貞丈雑記－一一「今世のしこの図左のごとし。是は今の世にある形なり〈略〉今の世の矢籠之図其形さまざまあり、一様ならず」〔語源説〕(1)サ

№ 1

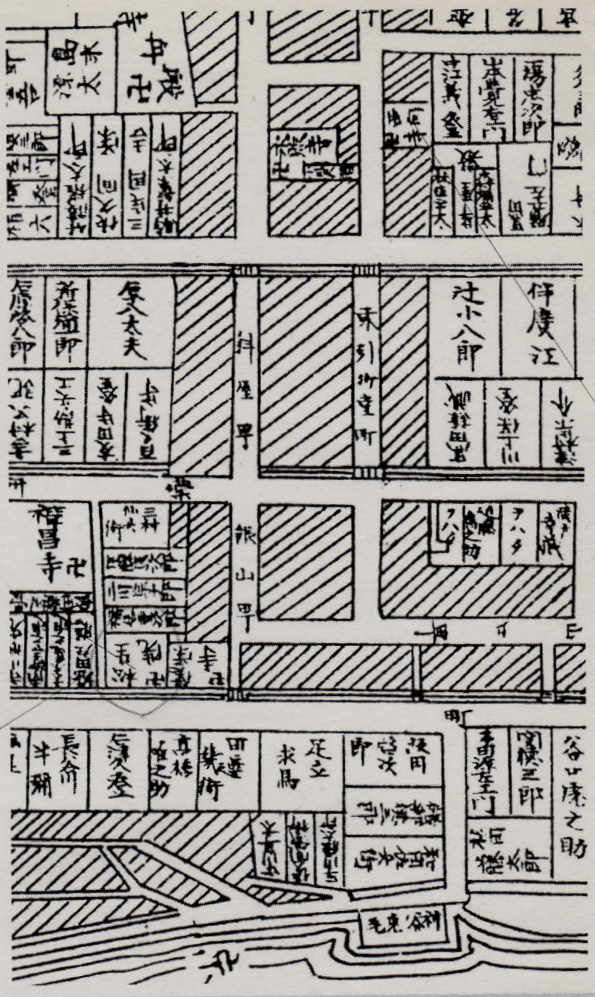
⑨ 松生院と堀田家屋敷

西光寺（胡社）

四 圓隆寺

松生院

堀田左膳



「広島城下絵図　其四　内白島八丁堀筋流川通柳町薬研堀ヨリ竹屋新開迄」（『藩政時代広島城明細絵図　附属城坊居館武家屋敷図』）

⑩ 圓隆寺は福昌山・慈善院と號す、日蓮宗にして、三川町にあり、本尊は久遠本師釋迦牟尼佛なり、開山は日音にして、後ち國前寺に入り、同寺十七世の住職と爲る、當寺は初め院號なし、寶永七年八世日應の院號に依り、初めて住眞院と唱へ、その後開山日音の院號に復して慈善院と稱するに至れり、今の寺地は元和五年の舊記に『新町南の末』と誌るされあり、當時此の地は城南の街端にして、新町組の内なりしと見ゆ、寛永十六年初めて竹屋町起るに及び、其區域に入り、中通組に屬せしが、明治十五年一月また三川町に屬することゝなりぬ、

『広島市史』社寺誌（大正十三年）

⑬ **かがみびらき**　鏡開き　正月に供えた鏡餅をおろしたあと、これを割って雑煮にしたりゼンザイや汁粉などにして、家族など一同が食べる行事。カガミワリ、カガミナラシ、イワイナオシなどともいう。正月飾りの中心であった鏡餅を食べることは、正月の終了と新しい生活の開始を意味するだけでなく、成員相互の結びつきを確認するにふさわしい行為であった。開くは割るの忌言葉で、開くといって切るや割るとはいわないのは、正月にあたって縁起をかついだもの。またこれは刃物を使うものではなく、手や木槌で割って食べるものだとされていた。正月二十日や十五日や十一日などに行われることが多い。二十日は二十日正月（オクリ正月・骨正月）と呼ばれ、大正月や小正月などの一連の行事が終り平常の生活に戻る区切りとなる日であった。また十五日は正月飾りが燃やされるとんどがあり、この火で鏡餅を焼いて食べるとするところが多い。十一日には仕事始め行事が多くみられるが、江戸の商家では蔵開きとともに一年中の帳簿が作られたという。このとき蔵のなかの鏡餅を割って使用人ともども食べたのは、仕事始めを祝うだけでなく大切な供物を下げ共食することで集団成員の結束を強めようとしたからである。武家では鎧や兜などの具足開きに際して、これに飾られていた鏡餅を雑煮にして家臣ともども食べたというが、これも同じ心意からである。また鏡餅が歯固めに利用されるようになると、本来正月三箇日に行われるものであった歯固めを、鏡開きの正月二十日に行う大分県速見郡山香町のような事例も生まれることになった。

↓蔵開き

歴史　圓隆寺は1619年(元和5年)、浅野長晟が僧・慈善院日音上人を開山に招聘して創建した。寺の別名であり、毎年行われる夏祭りの名称でもある「とうかさん」とは、当寺の鎮守であり、法華経を守護するとされる稲荷大明神のことで、稲荷を「とうか」と音読みしたのがその語源である。

⑫　「村上家乗」に現れる能美島

○(嘉永七年五月十日)高謙院様一昨夜能美島鹿河村より無御滞被為入候由、今朝出勤掛為伺御機嫌北御部屋へ罷出ル

○(七月廿九日)「高謙院様又々為御養生能美島へ今暁御渡海被成候由、石井寿兵衛御供ニ罷越候也

○(八月十九日)「高謙院様夜前従能美島被為入候ニ付、今朝為伺御機嫌罷出、老女幾田へ謁、其後御土産之由ニ而琉球芋御内々被下置也

○(安政二年正月五日)「高謙院様今暁窃ニ能美島へ御渡海被成候由

○(二月二日)「渡辺氏今間内窃ニ能美島へ渡海有之候処、夜前帰着之由也、

○(二月六日)「高謙院様夜前従能美島ゟ御入被成候由

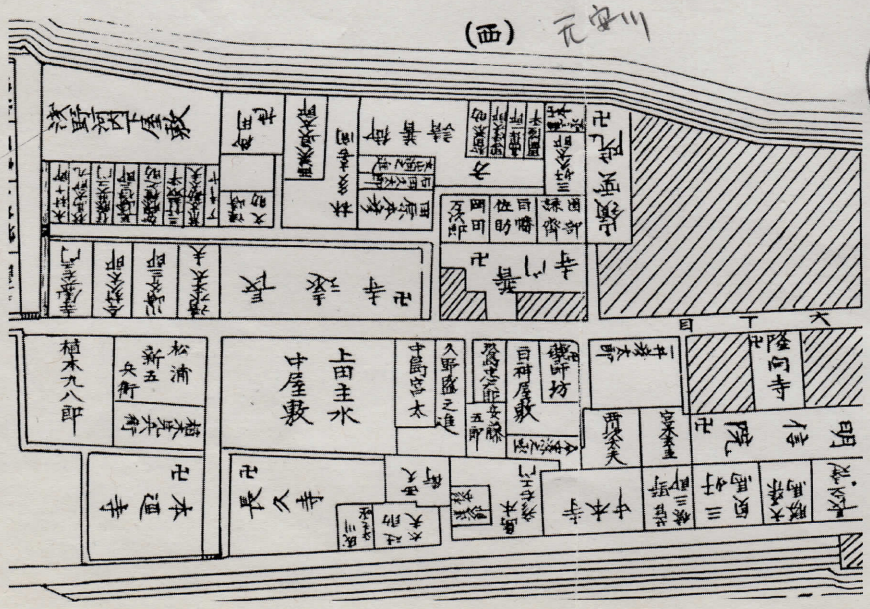
○(四月八日)「朝御奥江罷出、於信殿江始而御目通り仕ル也、於信殿者出衛様御子様ニ而、昨年十月、女中ちか於能美島御誕生申上、只今迄同所へ御内分ニ而御逗留被成候由之処、夜前窃ニ御奥へ御引取ニ被為成候之由、仍而無屹御様子伺旁罷出候也、

⑭
田辺幾衛……官切米取(鎗術番外)Ⓚ245B7
元治元(1864)奥詰③96A23
役奥詰③120B13,⑳77
(天保9父藤右衛門家督)
明治元(1868)納戸奉行次席③92A19

⑮ 下瀬孫平……文政5(1822)船作事所詰③102B4
嘉永3(1850)勘定所吟味役③101A18
安政6(1859)勘定所吟味役③101A22
文久3(1863)納戸奉行次席③92A8

⑯
堀田求馬……嘉永5(1852)納戸奉行次席③91B26
(格人)

⑭～⑯高橋新一編『「芸藩輯要」人名索引』


(西)
大工町
上田主水中屋敷
植木九八郎
松浦新五兵衛
久野盛之進
中島宮太
自神屋敷
安藤五郎
鍛冶屋坊
本願寺
本願寺
本願寺

三松生院

松生院は歡喜山・藥王寺と號す、宗派は古義眞言宗高野派なり、下柳町に在り、往古は紀州和歌山にありて、寺地は南をうけ、蘆など生ひたる渚邊なりしかば、向陽山蘆邊寺と稱せしが、慶長五年住職堯也の時、淺野左京太夫幸長紀州に封ぜられ、當院を以て祈禱所となし、祿米五十石を賜ふ、同十七年淺野但馬守長晟備中國蘆森の邑を領するに及び、別に祿米三十石を附して亦た其祈禱所と爲し、元和五年淺野氏移封して當國に治するや、堯也を廣島に召し、其の請を聽きて、もとの山號・寺號に適するの地を賜ひ、且つ金二百兩を賜ひて、當院を建て、舊稱を襲用し、向陽山蘆邊寺松生院と名づけしむ、是に於て紀州松生院には、弟子秀澤を留めて住持せしめ、當地に於ては堯也を開山・開基となす、造營の工成り、藩主長晟は世子岩松と共に再度參詣せられ、物を賜ふ、後ち寛永二年に至るまで、毎歲米五十石を給せられ、同三年閏四月藩主父子、復た駕を枉げ、銀五枚及び小袖二領を賜ふ、同八年九月八日堯也遷化し、同九年二月長晟より資を給はりて本堂を修繕す、同十二日光晟御日待の布施として、歲米十三石寄附の命あり、是より先き、前年九月堯也遷化し、法弟二人ありて、暫く輪番在勤せしが、後住のことより爭論を釀し、事遂に藩主の台聽に達す、是に於て寺格を褫ひ、一切の施與を悉く停めらる、この後ち本尊に藥師如來を安置し、寺號も藥王寺と改む、元祿三年本堂頽破せしも、修理の力なく、補助を願ひ、容るされて銀三十枚を賜ふ、正德五年本堂復た破損するに及び、前例を追ひて補資を請ひしも、許されず、後ち享保二年四月藩主吉長の夫人前

⑳

吉村秋陽（よしむら　しゅうよう）　寛政九年～慶応二年（一七九七～一八六六）

広島藩家老三原浅野家儒者。陽明学派。名は晋、字は麗明、通称は隆介、のち重介、六郷史民・秋陽と号した。寛政九年二月四日、吉村三左衛門の三男として広島に生まれた。本姓小田氏。吉村家は代々三原浅野氏の家臣。秋陽は幼少から記憶力に富み、国史を好んだという。十五歳のとき山口西園に入門し、さらに十八歳のとき京都に出て伊藤東涯に学んで古義学を修めた。文化十三年、浅野氏の屋敷に講学所（のち朝陽館）が創設されると、翌年抜擢されて助教となった。文政元年、三原城内に学校明善堂を創立する議が起こると、命を奉じて備中の儒者西山履軒を教頭に招聘する交渉にあたった。同十二年伊予今治藩から招かれて学を講じ、翌天保元年今治から大坂・京都に行き頼山陽を訪ねるなど、諸学者と交流。同年四月江戸において佐藤一斎に入門した。一斎は当時林家の塾長で、朱子学とともに陽明学を信奉した当代一流の学者であった。秋陽は江戸遊学中、朱子学から陽明学に転じ、翌二年の末帰広。朝陽館において講義を行うかたわら家塾を開き、のち咬菜（こうさい）と名付け、他藩からの遊学者で隆盛した。天保七年、一斎の推薦で長門国長府藩の督学となり、以後同九年と十年の三回長府に赴き、藩校敬業館で講義し、また信任を得て藩政の

田氏姓めるあり、變生男子の祈禱の命、明星院に下る（第二巻第一四六頁第四節明星院鎮國堂の建立の條参看）時に當院六世成眞また之に參し、聖天修法の事に任ず、事畢り、自院に還りて後ち、尚ほ竊かに藩家の爲に修法を續く、藩主これを嘉賞し、同六年八月修法内命の親書幷に銀を賜ひ、聖天堂を擴め、又新に本尊の厨子、其他の佛具を造る、聖天祈禱の命を受けし以來、毎歳祈禱料銀十貫三百二十目及祈禱堂造作佛具類諸品料銀五貫八百六十七匁六分餘を賜はる、是より山號を歡喜山と改め、遂に今の山號・寺號を唱ふるに至れり、寶暦八年大火の際、聖天堂類燒せしも、資を賜はりて元の如く再建し、天明七年十一世榮隆の時、又これを修し、左右に庇を加へ、三間四方となす、資金は藩主重晟より給せられし所なり、十二世快道の時、聖天堂の諸尊を全備す、其後ち賜銀增減ありしが、享保十九年藩府儉約令を布くに至り、一切の施與を廢し、祈禱料毎歳銀百枚を賜ふことに定めらる、

當院古來の什寶中、寶暦の大火に燒失せるものあるも、其大部は殘存せり、殊に安置の神佛諸像に至りては、總て舊時の儘なりといふ、もと當院は檀徒を有せず、故に境内に古墓なく、其在るものは開山堯也の墓のみ、

『広島市史』社寺誌（大正十三年）

議にもあずかるほどであった。同十年近習組となり、十五石を給された。同十三年幕府儒官となった一斎の招きで江戸に行き、昌平坂学問所の諸生の世話を委嘱されたが固辞して、翌年帰郷。嘉永元年、朝陽館教授・学館総裁となり二十石を給された。安政二年致仕し、嗣子駿（隆蔵）が家督し、教授職を継いだ。文久三年、三原へ移住を命ぜられた主家に従い広島から移居し、桜山山麓に屋敷を得、翌年「細雨春帆楼」と称する塾を開いた。この間も石見大田、周防岩国、讃岐多度津など、方々から招かれ講釈した。秋陽は陽明学を信奉したが朱子学にも造詣が深く、生徒に講釈する際は朱子の註をもってし、特に懇請されないかぎり陽明学の講釈はしなかったといわれる。慶応二年十一月十五日病没。享年七十歳。三原の香積寺に葬る。著書に『格致賸議』『王学提綱』『桃江諸説』『読我書楼文章』『読我書楼詩草』などがある。

〔『広島市史』、『広島県史』近世2、「三原志稿」〕

〈井野美津子〉

『三百藩家臣人名事典』6（新人物往来社）

⑲ 上田家系図

- 主水正重安一一代
- 安節（サダ）　淺野倫恭男　主水、松濤　文化四、一一生　文政四、一〇、二〇承　安政三、七、一沒
  - 夫人 富（トミ）　淺野長懋二女　文政元、一〇生　天保七、七、一二沒
  - 重美（シゲミ）　上田安世（安節養父）六男、安敦、内記、主水、讓翁　文政三、五生　安政三、八、二六承　明治三、一〇、三隱
    - 重遠　淺野長祚二男　安政三、正、一八生　明治三、一〇、三承　明治九、八、一一隱　明治一二、一二、一五離
      - 夫人 縫　淺野懋昭四女　文久二、一二生　明治九、一二離
      - 重美（シゲミ）　明治九、八再承　明治一〇、六隱　明治二一、一二、二六沒
        - 龜次郎（カメジロウ）　安節五男、安靖　嘉永二、一一、一九生　明治一〇、六、二七承　明治四〇、二、一五沒
          - 夫人 種子（タネ）　堀川久民長女　安政二、一二、一〇生　昭和一七、二、一五沒
  - 忠　宍戸親基夫人（離）　淺野道興夫人
  - 倍　淺野　忠夫人
  - 龜次郎

霞会館編『平成新修旧華族家系大成』（吉川弘文館）

令和元年五月例会資料（四月例会分後追い）

先々月進捗　樫井軍功之次第Ｐ77～終・家乗元日

一、先々月の活字読みの確認点

家乗（樫井軍功之次第……なし）

Ｐ0・3行目　『平天三年』は「平天下三年」

他、間違いではありませんが、解読文に注釈が漏れていました。

Ｐ1頭書

軸　由信蓬莱（狩野）　…　軸　庭田公御懐紙（重嗣）　…　軸　聿庵文字（頼）

二、指摘・意見・質問・その他

① Ｐ0　『安政二年龍次乙卯』

例会時、龍次についてＡ4班の中村さんがおっしゃって居ましたが、

【竜集】《「竜」は木星、「集」は星のやどり。竜星は一年に周回してもとのやどりに戻ることから》一年。紀年の下に添えて用いる。歳次。竜次。りょうしゅう。「慶応三年竜集丁卯」（大辞林）

② Ｐ1　『「兄方」』

正月元旦の頭書に「兄方」が毎年記してあります。　これは4種類しか有りません。　（兄は兄弟（陽陰）の兄）

十干が甲・巳の年＝寅卯の間（東北東）　乙・庚の年＝申酉の間（西南西）

丙・辛の年＝巳午の間（南南東）　丁・壬の年＝亥子の間（北北東）

戊・癸の年＝巳午の間（南南東）　の4種類です。

尚、六曜も簡単ですので序に。　一月から各月はじめに、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の順に配し七月以降も繰り返します。　閏は前の月と同じです。　次に月初めの六曜に続けて先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の順で配します。　以上余談でした。

……と書いたのですが…　？

アレッ！。安政二年は乙卯ゆえ申酉の間の筈ですが未申の間となっています。調べてみました。

手持の嘉永五年～明治四年の家乗を当たりますと、安政三・四年と明治二・三年が兄方不記載の他は、すべて右の説明通りの4種類でした。

ここも「未申（申酉カ）の間」とすべきかもしれません。

《裏に安政二年（嘉永八年）暦》

③ 家乗・彦右衛門

● 家乗：家の記録。一家の歴史。宗譜　家譜　世譜　（大辞林）

● 村上彦右衛門邦裕君綽謹記

文化十一年生まれ、幼名幾太郎。

文政三年改名　角人（通称・字）（天保頃の諱は「裕」と記している）

嘉永四年改名　彦右衛門（通称・字）　邦裕（諱）　君綽（字？・号？）

明治元年実名届け出　裕（ひろ）み（普段邦の字を略していた故の由）

三、報告・お知らせ

✧ 名簿の訂正

Ａ8：宮本美佐代さんを　石田信夫さんに変更し、

Ｂ8：石田信夫さんを空欄としてください。

✧ 次例会は六月八日（第二土曜日）午後一時半から　於当第二研修室です。

その日の会場当番は、　Ａ7班及びＢ7班です。

尚、七月例会は七月六日（第一土曜日）の予定です。

（八月は例年通り夏休みとします。）

✧ 平成30年度収支報告

当紙裏面に昨年度収支報告（監査報告）をコピーしました。

令和元年五月例会資料（四月例会分後追い）

先々月進捗　樫井軍功之次第Ｐ77～終・家乗元日

一、先々月の活字読みの確認点

家乗（樫井軍功之次第……なし）

Ｐ0.3行目　『平天三年』は「平天下三年」

他、間違いではありませんが、解読文に注釈が漏れていました。

Ｐ1頭書

軸　由信蓬莱（狩野）　…　軸　庭田公御懐紙（重嗣）　…　軸　聿庵文字（頼）

二、指摘・意見・質問・その他

①　Ｐ0　『安政二年龍次乙卯』

例会時、龍次についてＡ4班の中村さんがおっしゃって居ましたが、

【竜集】《「竜」は木星、「集」は星のやどり。竜星は一年に周回してもとのやどりに戻ることから》一年。紀年の下に添えて用いる。歳次。竜次。りょうしゅう。「慶応三年竜集丁卯」（大辞林）

②　Ｐ1　『「兄方」』

正月元旦の頭書に「兄方」が毎年記してあります。　これは4種類しか有りません。　（兄は兄弟（陽陰）の兄）

十干が甲・巳の年＝寅卯の間（東北東）　乙・庚の年＝申酉の間（西南西）

丙・辛の年＝巳午の間（南南東）　丁・壬の年＝亥子の間（北北東）

戊・癸の年＝巳午の間（南南東）　の4種類です。

尚、六曜も簡単ですので序に。　一月から各月はじめに、先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の順に配し七月以降も繰り返します。　閏は前の月と同じです。　次に月初めの六曜に続けて先勝・友引・先負・仏滅・大安・赤口の順で配します。　以上余談でした。

……と書いたのですが…　？

アレッ！。安政二年は乙卯ゆえ申酉の間の筈ですが未申の間となっています。調べてみました。

手持の嘉永五年～明治四年の家乗を当たりますと、安政三・四年と明治二・三年が兄方不記載の他は、すべて右の説明通りの4種類でした。

ここも「未申（申酉カ）の間」とすべきかもしれません。

《裏に安政二年（嘉永八年）暦》

③　家乗・彦右衛門

●　家乗：家の記録。一家の歴史。宗譜　家譜　世譜　（大辞林）

●　村上彦右衛門邦裕君綽謹記

文化十一年生まれ、幼名幾太郎。

文政三年改名　角人（通称・字）（天保頃の諱は「裕」と記している）

嘉永四年改名　彦右衛門（通称・字）　邦裕（諱）　君綽（字？・号？）

明治元年実名届け出　裕ひろ（普段邦の字を略していた故の由）

三、報告・お知らせ

✧　名簿の訂正

Ａ8：宮本美佐代さんを　石田信夫さんに変更し、

Ｂ8：石田信夫さんを空欄としてください。

✧　次例会は六月八日（第二土曜日）午後一時半から　於当第二研修室です。

その日の会場当番は、　Ａ7班及びＢ7班です。

尚、七月例会は七月六日（第一土曜日）の予定です。

（八月は例年通り夏休みとします。）

✧　平成３０年度収支報告

当紙裏面に昨年度収支報告（監査報告）をコピーしました。

古文書解読同好会収支報告書

（平成30年4月~平成31年3月）

収入の部		支出の部	
前期繰越金	11.574	会場使用料	70,000
会費	194,000	例会資料他コピー代	12.820
		テキスト印刷代	18.510
		次期繰越金	104,244
合　計	205.574	合　計	205.574

上記の通り期間中の収支を報告致します。

平成３１年 4 月 6 日

会　計（A６）

会計監査（B６）

以上

（参考）

期首会員数９９名（内新入会員　８名）

期末　〃　８９名（退　会　１０名）

１０月例会休会（台風）

平成30年度収支について出納帳並びに証憑書類等を基に監査を行った結果、全て適正に処理されている事を確認しましたので報告いたします　平成31年4月6日　[illegible]

歳徳明きの方＝東方が、さとりの間方より一となっています。

1855年（嘉永八年―安政二年）『京暦』大阪暦天文暦学　京都陰陽師

嘉永七年出（古本サンプル画像）

広島開基と軍功之次第　参考資料目録　　h30・5月～H31・4月

分類	項目	読み	年	月	No.	出典	発行所
人名	浅野三十郎	あさのさんじゅうろう	h30	6	12	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	浅野忠吉	あさのただよし	h30	11	1	三百藩家臣人名事典	新人物往来社
	浅野帯刀	あさのたてわき	h30	6	4	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	浅野長十郎	あさのちょうじゅうろ	h30	6	17	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	浅野知近	あさのともちか	h30	11	3	三百藩家臣人名事典	新人物往来社
	阿部籐四郎	あべとうしろう	h30	5	18	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	板倉勝重	いたくらかつしげ	h30	11	22	日本近世人名辞典	吉川弘文館
	井上正就	いのうえまさなり	h31	3	16	国史大辞典	吉川弘文館
	上田宗箇	うえだそうこ	h31	1	13	三百藩家臣人名事典	新人物往来社
	上田主水入道宗古	うえだもんどにゅうど	h31	1	14	武辺咄聞書	菊池真一編
	宇多国宗	うだくにむね	h30	5	20	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	大久保権兵衛	おおくぼごんべえ	h30	6	5	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	大倉卿局	おおくらきょうつぼ	h30	11	20	日本女性人名辞典	日本図書センタ
	大野治胤	おおのはるたね	h30	11	19	戦国人名事典	吉川弘文館
	大野治長	おおのはるなが	h30	11	17	戦国人名事典	吉川弘文館
	大野治房	おおのはるふさ	h30	11	18	戦国人名事典	吉川弘文館
	岡部則綱	おかべのりつな	h30	12	21	フリー百科	
	岡本靭負	おかもとゆきえ	h30	6	19	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	梶川一郎兵衛	かじかわいちろうべ	h30	6	8	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	兼常	かねつね	h31	4	3	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	亀田大隅高総	かめだおおすみた	h31	1	15	武辺咄聞書	菊池真一編
	亀田高綱	かめだたかつな	h30	11	2	三百藩家臣人名事典	新人物往来社
	杉田新兵衛	すぎたしんべえ	h30	6	10	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	高田角右衛門	たかだかくえもん	h30	6	24	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	高野蔵人	たかのくろうど	h30	6	13	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	田中玄蕃	たなかげんば	h30	6	9	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	団　弥五右衛門	だん　やごえもん	h30	6	21	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	調子図書	ちょうしずしょ	h30	6	23	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	寺尾刑部	てらおぎょうぶ	h30	6	20	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	寺西勝佐	てらにしかつさ	h30	6	14	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	寺西権右衛門	てらにしごんえもん	h30	6	18	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	徳川義直	とくがわよしなお	h31	3	2	国史大辞典	吉川弘文館
	得能左次右衛門	とくのうさじえもん	h30	6	26	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	戸田保大夫	とだやすだゆう	h30	6	15	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	中尾十大夫	なかおじゅうだゆう	h30	6	25	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	二宮就辰	にのみやなりたつ	h30	5	10	戦国大名家臣団事典	新人物往来社
	原　作右衛門	はら　さくえもん	h30	6	22	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	原　伝三郎	はら　でんさぶろう	h30	6	7	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	塙　直之	ばん　なおゆき	h30	12	20	戦国武将合戦事典	吉川弘文館
	福島元長	ふくしまもとちょう	h30	5	16	広島県大百科事典	中国新聞社
	保昌貞宗	ほうしょうさだむね	h31	3	4	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	八島勘大夫	やしまかんだゆう	h30	6	11	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	弓削頼母	ゆげたのも	h30	6	6	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	弓削忠左衛門	ゆげちゅうざえもん	h30	6	16	芸藩輯要人名索引	高橋新一
	吉光	よしみつ	h30	5	19・2	日本刀大百科事典	雄山閣出版
図	城郭内之屋敷之変遷1	じょうかくないのやし	h30	5	25	広島県史　1編	大正10年
	城郭内之屋敷之変遷2	じょうかくないのやし	h30	5	26	広島県史　1編	大正10年
	福島時代の侍屋敷	ふくしまじだいのさ	h30	5	23	広島県史　1編	大正10年
	文化年間の侍屋敷	ぶんかねんかんの	h30	5	24	広島県史　1編	大正10年
	毛利時代の家臣配置図	もうりじだいのかし/	h30	5	22	広島県史　1編	大正10年
名簿系図	浅野宗家と三原浅野家	あさのそうけとみは	h30	11	7	三原市史、2	通史編
	浅野長晟関係系図	あさのちょうあきらか	h30	9	4	？	
	上田家歴代当主一覧	うえだけれきだいと	h30	6	3	東城町史	平成13年
	東城浅野家歴代当主一覧	とうじょうあさのけれ	h30	6	1	東城町史	平成11年
	福島氏系図	ふくしましけいず	h30	6	27	広島県史近世1	付録
	三原浅野家歴代当主一覧	みはらあさのけれき	h30	6	2	東城町史	平成12年

引用	大内義隆宛行状	おおうちよしたかあ	h30	5	9	広島県史、古代	資料篇Ⅴ
	樫井の戦い「徳川実記」	かしいのたたかい	h31	3	17	交通史大辞典	吉川弘文館
	樫井の戦い、戦後の動向	かしいのたたかい、	h31	3	1	浅野家の記録から	
	樫井の戦い、当日の動向	かしいのたたかい、	h31	2	1	浅野家の記録	
	金丸小伝次呈出覚書	かねまるこでんじて	h31	2	15	浅野家文書	東大出版
	将軍秀忠との面会	しょうぐんひでた	h31	4	1	上田家文書調査報告書	家政史料集成
	夏の陣後の宗箇の退去	なつのじんごのそ	h31	4	2	上田家文書調査報告書	家政史料集成
	松浦作右衛門提出覚書	まつうらさくえもんて	h31	2	14	浅野家文書	東大出版
	毛利輝元書状　17	もうりてるもとしょじ	h30	5	11	広島城と毛利氏居城	広島城記念事業
	毛利輝元書状　17解説	もうりてるもとしょじ	h30	5	13	広島城と毛利氏居城	広島城記念事業
	毛利輝元書状　18	もうりてるもとしょじ	h30	5	12	広島城と毛利氏居城	広島城記念事業
	毛利輝元書状　18解説	もうりてるもとしょじ	h30	5	14	広島城と毛利氏居城	広島城記念事業
事項	浅野氏知行之変遷	あさのしちぎょうの	h30	9	9	広島県史1	
	浅野長晟信達に陣す	あさのながあきらし	h30	11	21	大日本史料12―18	東大史料編纂所
	浅野長政意見状	あさのながまさいけ	h30	9	2	浅野家文書	大日本古文書
	浅野長政意見状(意訳)	あさのながまさいけ	h30	9	3	浅野家文書	大日本古文書
	粟田口鍛治(系図付)	あわたぐちかじ(けい	h30	5	19・1	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	家康浅野へ出陣を命ず	いえやすあさのへし	h30	11	15	大日本史料12―18	東大史料編纂所
	大坂方ゟ来援を請う	おおさかかたからい	h30	11	14	大日本史料12―18	東大史料編纂所
	大坂冬の陣	おおさかふゆのじ	h30	11	6	和歌山県史	近世
	街道の通し方	がいどうのとおしか	h30	5	33	城のつくり方図典	小学館
	樫井戦までの浅野長晟	かしいせんまでのあ	h30	9	1	浅野家文書	大日本古文書
	川之内海賊衆	かわのうちかいぞく	h30	5	15	広島県大百科事典	中国新聞社
	守護代福島氏	しゅごだいふくしま	h30	5	17	安芸武田氏	河村昭一
	旗差物	はたさしもの	h31	2	19	武家名目抄	古事類苑
	日高・有田・名草の一揆	ひだか・ありた・なく	h31	3	10	和歌山県史	近世
	平城の土塁は掻き揚げ	ひらじょうのどるいは	h30	5	32	城のつくり方図典	小学館
	広島開基(文久二年)	ひろしまかいき(ぶ	h30	5	5	一六叢書27	毛利家文庫
	広島開基(万治元年)	ひろしまかいき(ま	h30	5	4	一六叢書27	毛利家文庫
	広島開基写本について	ひろしまかいきしゃ	h30	5	1		西村氏作成
	広島城地見分築城の記録	ひろしまじょうちけ	h30	5	6	史跡城址資料集	後藤陽一
	広島由来　(正保二年)	ひろしまゆらい　(し	h30	5	3	一六叢書27	毛利家文庫
	保昌派	ほうしょうは	h31	3	5	日本刀大百科事典	雄山閣出版
	摩利支天信仰	まりしてんしんこう	h31	1	5	国史大辞典	吉川弘文館
	港町	みなとまち	h31	3	11	和歌山県史	中世
	山県氏覚書(慶長元和頃か)	やまがたしおぼえか	h30	5	2	広島県史古代1	岩国徴古館蔵
	鎗	やり	h31	2	12	日本史大事典	平凡社
	幸長継嗣をめぐる家臣対立	ゆきながけいしをめ	h30	9	8	徳川実記1	国史大系
字句	足纏	あしまとい	h31	1	19	日本国語大辞典	小学館
	天晴・遖	あっぱれ・あっぱれ	h31	3	6	日本国語大辞典	小学館
	豈	あに	h30	6	39	日本国語大辞典	小学館
	如何に	いかに	h31	1	30	日本国語大辞典	小学館
	居丈高	いたけだか	h30	12	15	日本国語大辞典	小学館
	一番槍	いちばんやり	h31	1	17	武家戦陣作法集成	笹間良彦
	今に	いまに	h31	1	2	日本国語大辞典	小学館
	打ち担ぐ	うちかたぐ	h31	1	26	日本国語大辞典	小学館
	謳歌	おうか	h30	6	30	日本国語大辞典	小学館
	大矩・大曲	おおがね	h30	5	28	日本国語大辞典	小学館
	折敷き	おりしき	h31	1	24	日本国語大辞典	小学館
	折敷き	おりしき	h31	2	3	日本国語大辞典	小学館
	荷	か	h30	5	30	日本国語大辞典	小学館
	箇・個・个	か	h31	1	20	日本国語大辞典	小学館
	我意、我意に任す	がい、がいにまかす	h30	6	29	日本国語大辞典	小学館
	駆落ち・欠け落ち	かけおち・かけおち	h31	1	27	日本国語大辞典	小学館
	籠	かご	h30	6	36	角川大字源	
	肩先	かたさき	h31	2	9	日本国語大辞典	小学館
	勘気	かんき	h31	3	12	日本国語大辞典	小学館

字句	感じ入る	かんじいる	h31	2	4	日本国語大辞典	小学館
	感状	かんじょう	h31	3	3	日本史大事典	平凡社
	聞き逃げ	ききにげ	h30	12	10	日本国語大辞典	小学館
	吉凶悪し	きっきょうわろし	h30	12	11	日本国語大辞典	小学館
	け・ケ	け・け	h31	1	21	日本国語大辞典	小学館
	行年	こうねん	h31	2	22	日本国語大辞典	小学館
	刻	こく	h30	6	34	くずし字用例辞典	東京堂出版
	爰	ここ	h30	6	35	角川大字源	
	此方	こなた	h30	12	17	日本国語大辞典	小学館
	此方	こなた	h31	3	8	日本国語大辞典	小学館
	鬧	さわがしい	h31	3	14	角川大字源	
	しぐらう	しぐらう	h31	1	10	角川古語大辞典	
	しぐらむ	しぐらむ	h31	1	9	角川古語大辞典	
	しぐらむ	しぐらむ	h31	1	11	角川古語大辞典	
	強か	したたか	h31	2	6	日本国語大辞典	小学館
	しどろ	しどろ	h31	1	8	角川古語大辞典	
	十文字槍	じゅうもんじやり	h31	1	25	日本国語大辞典	小学館
	入魂	じゅこん	h30	6	33	日本国語大辞典	小学館
	諚	じょう	h31	3	15	角川大字源	
	城地	じょうち	h30	5	29	日本国語大辞典	小学館
	如才・如在	じょさい・にょざい	h30	11	8	日本国語大辞典	小学館
	尻払い	しりはらい	h31	2	10	日本国語大辞典	小学館
	尻払い	しりはらい	h31	3	7	日本国語大辞典	小学館
	陣	じん	h30	11	13	角川大字源	
	陣触	じんふれ	h30	11	11	日本国語大辞典	小学館
	千枚分銅	せんまいふんどう	h30	11	4	日本国語大辞典	小学館
	訴訟	そしょう	h31	3	13	日本国語大辞典	小学館
	退却	たいきゃく	h30	12	5	武家戦陣作法集成	笹間良彦
	太閤	たいこう	h30	11	9	日本国語大辞典	小学館
	縦令	たとい	h30	12	6	日本国語大辞典	小学館
	試し・例・様	ためし	h30	12	12	日本国語大辞典	小学館
	樽肴	たるさかな	h30	5	31	日本国語大辞典	小学館
	誅戮	ちゅうりく	h30	6	31	日本国語大辞典	小学館
	陳	ちん	h30	11	12	角川大字源	
	党	とう	h30	6	37	角川大字源	
	当理	とうり	h30	6	38	大漢和字典	大修館書店
	何様	なにさま	h30	12	14	日本国語大辞典	小学館
	ならで	ならで	h31	1	28	日本国語大辞典	小学館
	日來	にちらい	h30	6	32	日本国語大辞典	小学館
	旗色	はたいろ	h31	1	22	日本国語大辞典	小学館
	旗奉行	はたぶぎょう	h31	1	16	武家戦陣作法集成	笹間良彦
	飛札	ひさつ	h30	11	10	日本国語大辞典	小学館
	人塚	ひとづか	h31	2	5	日本国語大辞典	小学館
	人持組(金沢藩)	ひともちぐみ	h30	5	21	藩史大事典3	雄山閣出版
	深田	ふかだ	h30	12	8	日本国語大辞典	小学館
	深田	ふけだ	h30	12	9	日本国語大辞典	小学館
	見え透く	みえすく	h30	12	7	日本国語大辞典	小学館
	御心	みこころ	h31	1	3	日本国語大辞典	小学館
	物の具	もののぐ	h30	12	16	日本国語大辞典	小学館
	矢頃	やごろ	h31	1	23	日本国語大辞典	小学館
	奴原	やつばら	h31	1	29	日本国語大辞典	小学館
	やらん	やらん	h30	12	18	日本国語大辞典	小学館
	脇板	わきいた	h31	2	8	日本国語大辞典	小学館
	脇坪	わきつぼ	h31	2	7	日本国語大辞典	小学館
用例	于(今)	(いまに)う	h31	1	7	くずし字用例辞典	児玉幸太編
	爾(今)	(いまに)じ	h31	1	6	くずし字用例辞典	児玉幸太編
	漢字・片仮名の合字	かんじ・かたかなの	h30	6	28	日本古文書学	雄山閣出版
	ね・弥・子	ね・ね・ね	h31	3	18	日本史大事典	小学館

	旗	はた	h31	1	18	異体字解読字典	柏書房
寺社	蟻通神社	ありとおりじんじゃ	h30	12	2	大坂府の地名2	平凡社
	昭和時代の蟻通神社	しょうわじだいのあり	h30	12	4	蟻通神社HP	
	瑞川寺	ずいせんじ	h30	5	27	広島市史社寺誌	大正13年
	段原摩利支天堂	だんはらまりしてん	h31	1	4	広島市史、社寺誌	大正13年
	摩利支天	まりしてん	h31	1	1	日本民族大辞典下	吉川弘文館
地名地図	浅野家大坂夏の陣の編成	あさのけおおさかの	h30	12	13	？	
	大坂樫井付近地図	おおさかかしいふ	h30	11	16	大坂府の地名2	平凡社
	大鳥居と長岡王子跡	おおとりいとながおお	h31	2	11	阪南山中渓http	
	遠野小野村	おりおのむら	h30	12	19	大坂府の地名1	平凡社
	樫井川古戦場	かしいがわこせんじ	h30	12	1	大坂府の地名2	平凡社
	北庄	きたのしょう	h30	5	8	広島県の地名	平凡社
	熊野街道	くまのかいどう	h31	2	20	歴史と古道	人文書院
	筆王子	ふでおうじ	h31	2	13	和漢三才図会	三一書房
絵写真	浅野家入城300年記念記事1	あさのけにゅうじょう	h30	9	5	浅野家文書	大正9・10・13
	浅野家入城300年記念記事2	あさのけにゅうじょう	h30	9	6	中国新聞記事	大正9・10・13
	浅野長晟肖像	あさのながあきらし	h30	9	7	広島市史1巻口絵	
	城地を定める毛利輝元	じょうちをさだめるも	h30	5	7	広島城と毛利氏居城	広島城記念事業
	泉州樫井合戦図	せんしゅうかしいか	h31	2	21	ひろしま美術館図録	上田宗箇展
	竹茶杓「敵がくれ」	たけちゃしゃく「てき	h31	2	2	ひろしま美術館図録	上田宗箇展
	徳川義直像	とくがわよしなおぞ	h31	3	9	国史大辞典	吉川弘文館
	「名古屋春姫道中」写真	「なごやはるひめど	h30	9	10	？	
	分銅金(写真)	ふんどうきんしゃし	h30	11	5	貨幣の歴史学	日銀情報サービス
	摩利支天像	まりしてんぞう	h31	1	12	日本国語大辞典	小学館
表、年譜	大坂冬の陣。夏の陣年表	おおさかふゆのじん	h30	11	23	敗者の日本史	吉川弘文館
	樫井の戦いの浅野方	かしいのたたかいの	h31	2	17	作表　西村氏	
	樫井の戦いの大坂方	かしいのたたかいの	h31	2	18	作表　西村氏	
	樫井の戦いまでの経過	かしいのたたかい	h30	12	3		西村氏作成
	方位・時刻表	ほうい・じこくひょう	h31	4	4	角川日本史辞典	
	幸長・長晟・長重の年譜	ゆきなが・ながあき	h30	9	11	浅野家文書ち	西村氏作成
	被災文書レスキュウのボランティア活動	ひさいもんしょれすきゅうのぼらんてぃあかつどう	h31	4	別冊	三浦・久保・諸富・安藤・富永	

不動院

国宝「金堂」（左）と国重文「楼門」（右）が、重厚な姿で並ぶ不動院の境内、新緑の木立之間に、金堂の柿葺（こけらぶき）屋根が堂々たる風格を見せている

R15.4.19 中国新聞

広島開基と軍功之次第　後追い資料目録

項目	読み	年	月	掲載順 No.	出典	
妙慶院と松雲院	みょうけいいんとし	h30	5	2・1	広島市史	
長尾隼人	ながおはやと	h30	5	3・2	東城御通り保存会	
村上彦衛門	むらかみひこえもん	h30	5	3・3	wiki要約	
石火矢	いしびや	h30	5	3・4	wiki	
毛利御家の広とは	もうりおいえのひろ	h30	6	2・1	wiki	
6頁概略	6へーじがいりゃく	h30	6	2・3	解読文	
在番	ざいばん	h30	6	2・4	古語辞典	
亀井武蔵頭滋矩	かめいむさしのかみ	h30	6	2・5	wiki	
原藤四郎の御脇差	はらとうしろうのおま	h30	6	裏面	つるぎの屋HP	
玉置宗左衛門	たまおきそうざえも	h30	7	2・1	芸藩輯要	
被申候家	ひもうそろいえ	h30	7	2・2		
本安橋	もとやすばし	h30	7	5津箱	Wiki	
毛利時代家臣配置図	もうりじだいかしんは	h30	7	裏面	先月資料22	
福島時代の侍屋敷	ふくしまじだいのさ	h30	7	裏面	先月資料23	
樫井の戦い概要	かしいのたたかいが	h30	9	4	万津箱	wiki
樫井合戦図	かしいかっせんず	h30	9	裏面	hp＆gugul	
浅野の広島入城と藩政	あさののひろしまに	h30	11	5津箱		
被爆前の広島城	ひばくまえのひろし	h30	11	裏面		
毛利・福島・浅野三家	もうり・ふくしま・あさ	h30	11	裏面		
条	じょう	h30	12	2・1	大辞泉	小学館
合戦地図と石碑	かっせんちずとせき	h30	12	5津箱		
陣所地図	じんしょちず	h30	12	裏面		
縛り首	しばりくび	h31	1	2・1	大辞林	
淡輪重政	たんのわしげまさ	h31	1	5津箱	Wiki	
井伊掃部頭年賀状	いいかもんかみねん	h31	1	裏面		
岡部則綱	おかべのりつな	h31	2	2・1		
塙・淡輪の交戦異説	ばん・たんのわのこ	h31	2	2・2		
先月付録解読・尽期	せんげつふろくかい	h31	2	5津箱	大辞泉	小学館
泉州より和歌山辺	せんしゅうよりわか	h31	2	裏面		
井上正就vs豊島明重	いのうえまさなりvs	h31	3	葛津箱		

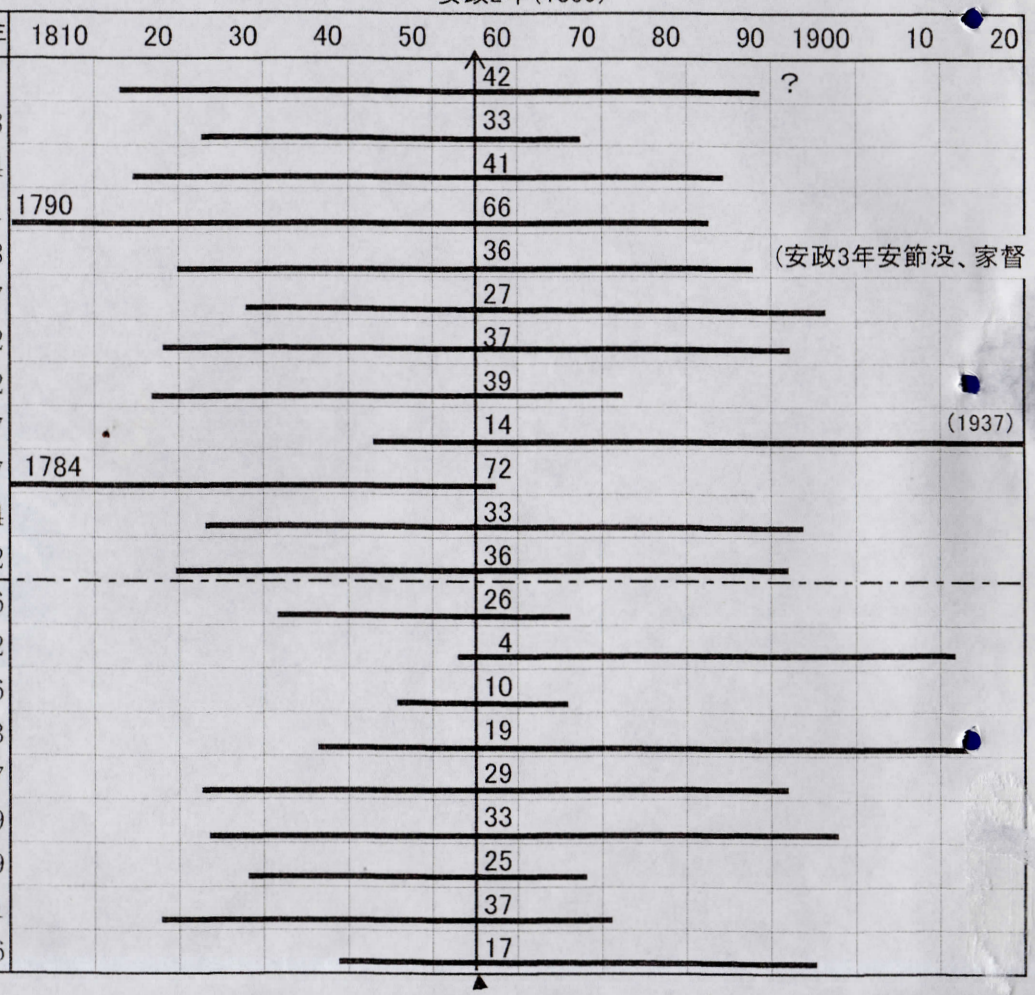
福島正則の墓 ⇓

安国寺恵瓊の墓 ⇓

村上家乗　年令表

安政二年現在

氏名	生年	―	没年	西暦生年	―	同没年	安政2年(1855)を基準とした年令
村上彦右衛門	文化11	―	?	1814	―	?	42
森岡万之進	文政6	―	慶應4	1823	―	1868	33
浅野豊後(道興)	文化12	―	明治17	1815	―	1884	41
慈君(おせん)	寛政2	―	明治14	1790	―	1881	66
上田主水(安敦)	文政3	―	明治21	1820	―	1888	36
浅野右近	文政12	―	明治30	1829	―	1897	27
浅野遠江	文政2	―	明治25	1819	―	1892	37
浅野長訓	文化14	―	明治5	1817	―	1872	39
浅野長勲	天保13	―	昭和12	1842	―	1937	14
今中大学	天明4	―	安政4	1784	―	1857	72
辻　将曹	文政6	―	明治27	1823	―	1894	33
石井修理	文政3	―	明治25	1820	―	1892	36
孝明天皇	天保2	―	慶應2	1831	―	1866	26
明治天皇	嘉永5	―	明治45	1852	―	1912	4
徳川家茂	弘化3	―	慶應2	1846	―	1866	10
徳川慶喜	天保8	―	大正2	1837	―	1913	19
西郷隆盛	文政5	―	明治24	1827	―	1877	29
勝　海舟	文政6	―	明治32	1823	―	1899	33
吉川監物	文政12	―	明治2	1829	―	1869	25
毛利敬親	文政2	―	明治45	1819	―	1871	37
毛利元徳	天保10	―	明治29	1839	―	1896	17



安政2年　1855

(2019/4/15　文責　下寺)

安政二年「村上家乗」参考資料（令和元・6・8）3

① 安政元年十二月二十八日の江戸火災

庫裡等焼亡せり○同廿八日、酉下刻、神田多町貳丁目北側なる、乾物屋三河屋半次郎が宅より出火して、始は北西の風強く、連雀町、新銀町、佐柄木町、須田町へ焼込、北風に替りて須田町二丁目、通新石町より通り町筋本銀町、本石町、本町四丁、本南替町、駿河町、北鞘町、品川町、室町壹丁目、日本橋際迄、東は小柳町、黒門町、三島町、岸町、永井町、富山町、紺屋町邊、浮世小路、鹽河岸、瀬戸物町、小田原町、本船町、同河岸通迄焼出し、聽にいたり東風になり、又色々に替りて西の方雉子町、四軒町、三河町四丁、同塞町、此邊武家地養安院屋敷、鍵倉町、龍閑町、松下町、永富町、皆川町の邊にいたる、此間に挟れたる町々は殘る所なく焼て、廿九日朝五時頃鎮れり、宰やしさ殘り、東神田平永町より東の方は殘なし、武家地の焼亡は少し、町數は百一ケ町、長十町三十間餘、町幅平均にして四町四十間程といふ○此冬更に雨なし

「増訂武江年表　巻九（安政元年）」
（国立国会図書館デジタルコレクション）

② 海蔵寺

現西区田方一丁目

曹洞宗。久遠山と号し、聖観音を本尊とする。開基年代は不詳であるが、永正年間（一五〇四―二一）の立庵を中興の祖とする。江戸時代は佐方村洞雲寺（現佐伯郡廿日市町）の末寺であった。「国郡志下調書出帳」によれば、草津城に拠った児玉就方が天正一二年（一五八四）に寄進した鐘があり、その鐘銘を載せる。そのほか同一四年に羽仁美濃守親玄が寄進した鐘もあったという。

境内には浅野氏の墓所がある。古江村の給主であった広島藩家老堀田浅野家の祖堀田高英は、堀田高勝の子で寛永一八年（一六四一）浅野姓を許されて家老となったが、同年七六歳で没し、光照院と謚して当寺に葬られた。以後、浅野氏歴代の墓が築かれている。また北条氏直の墓もあり前記書出帳は「白翁宗雲大居士　天正十九辛卯年十一月朔日　右北条左京太夫氏直公之墓」と記す。寛文三年（一六六三）の「芸備国郡志」の海蔵寺の項に「堂前有北条氏直之墓、想前代北条氏恩顧之人領此所、為氏直設之乎」とあるが、「芸藩通志」は諸説をあげてその由来を考証している。

『広島県の地名（日本歴史地名体系35）』（平凡社）

③ 修正祈祷寶牘について

お寺から、年賀として修正祈祷寶牘をお持ち、またはお送りいたします。
このお札は、正月三ヶ日 檀信徒の皆さまの一年のご安寧を願って『大般若経』による御祈祷をしたものです。
お仏壇や神棚にお祀りされるか、もしくは戸棚の上や鴨居等の明るく清浄で目線より高い場所にお祀り下さるようお願い申し上げます。

郡山市の曹洞宗　光邦山　徳成寺のホームページより

④ 坊主　ぼうず

もとは房主とも書き、僧房の主を言った。のちの住持、*住職にあたり、また一般に僧侶の呼称ともなった。

⇨坊主衆

［武家の職名］江戸幕府には、同朋頭（若年寄支配）の配下に、茶部屋を管理し、将軍、大名、諸役人に茶を

⑥ 広島藩の坊主

一御数寄方坊主

日々登城○御軸物御屏風御茶器御花器等ヲ引受御茶道活花等之儀ヲ専務ス○江戸詰被仰付

一御居間方坊主

日々登城シテ御奥小姓ノ差圖ヲ請ケ御前向ニ掛ル御仕構ノ事等ヲ爲シ御時計ヲ預ル○泊リ御番ヲ預ル○

⑦

や・む【止・已・罷】■『自マ五（四）』①自然現象の動きが消えてなくなる。風雨、雪などがおさまる。

進めることなどを職務とする奥坊主組頭（五〇俵持扶持高、役扶持二人扶持、役金二七両、御目見以下、土圭間詰、二半場）・奥坊主（二〇俵二人扶持高、役扶持二人扶持、役金二三両、御目見以下、土圭間詰、二半場）一〇〇人前後、および殿中において大名・諸役人に給仕することなどを職務とする表坊主組頭（四〇俵二人扶持高、四季施代金四両、御目見以下、躑躅間詰、二半場）・表坊主（二〇俵二人扶持高、御目見以下、焼火間詰、二半場）二〇〇人前後があった（この職は大名や諸役人からの心付が多く、家計は豊かで、そのため奢侈僭越に流れたという）。また茶室に関するいっさいのことをつかさどる数寄屋頭（若年寄支配）の配下に、数寄屋坊主組頭（四〇俵持扶持高、四季施代金四両、御目見以下、躑躅間詰、二半場）・数寄屋坊主（二〇俵二人扶持高、御目見以下、焼火間詰、二半場）四〇―一〇〇人ほどがあった。このほかには、寺社奉行の配下に、紅葉山御宮付・御霊屋付坊主（五〇俵持扶持高、役扶持二人扶持、御目見以下、御右筆部屋縁頬詰、二半場）一二人、紅葉山御高盛坊主（三〇俵二人扶持高、四季施銀五枚、焼火間詰、二半場）一六人、紅葉山御宮付・御霊屋付御縁頬坊主（二〇俵二人扶持高、二半場）四人があり、また二条城御殿預（所司代支配）の配下に、坊主（現米一〇石二人扶持）一七人のあったことが知られる。

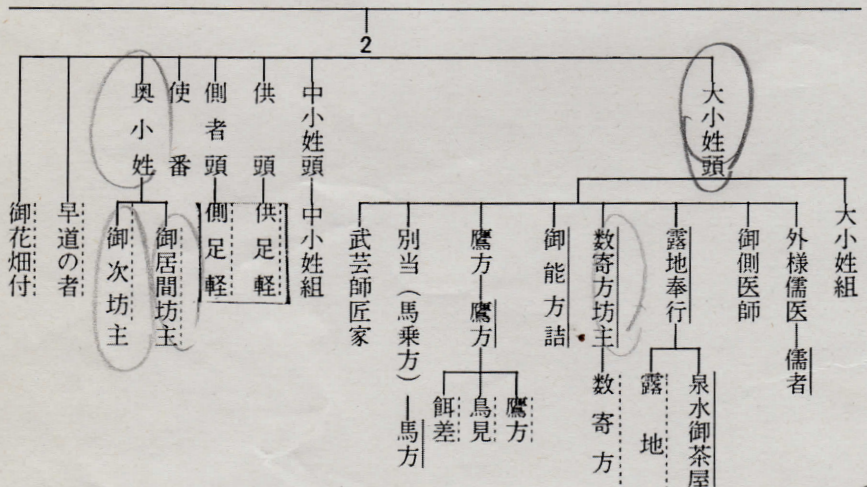
北原章男

『日本史大事典』（平凡社）

⑤

広島藩職制一覧（抄・君側）

藩主―年寄（1奥掛り　2君側　3御軍刀掛り　4郡市　5米銀の事　6江戸交代　―を分掌する）



『広島県史』近世2

御他出ノ節御茶辨當ニ附添○御參勤御歸國ノ節御供被仰付

一御次坊主

日々登城シテ御家老御中老紅葉之間同御様側九曜ノ間萩ノ間唐草之間ヘ罷出ル御役々ノ差圖ヲ受ケ茶煙草盆出シ引御座上ノ使等ヲ專務トス○江戸詰被仰付

『芸藩輯要』第三編　藩士名鑑（御役之章程）

*万葉―一〇・一九三二「春雨の止（やま）ず降る降る吾が恋ふる人目をすらにあひ見せなくに〈作者未詳〉」*土左―承平五年一月二八日「よもすがら雨やまず」*枕―三〇二・十二月二十四日、宮の御仏名の「日ごろ降りつる雪の今日はやみて」*方丈記「かく、おびたたしく振る事は、しばしにてやみにしかども」*俳諧・曠野―五・仲冬「柴の戸をほどく間にやむ霰哉〈宗之〉」②物事が途中で行なわれなくなる。続いてきたある状態がとだえる。*万葉―二〇・四三〇三「わが

⑧

がっき ガク：【学規】《名》学校の規則。また、学課の規定。*大小学校建議〈加藤有隣〉「藩府県ともに甲令学規等、何づれも大学校の教法によりて等殺省略すべく候」*宋史―朱熹伝「詣二郡学一、引二進士子一、与之講論、訪二白鹿洞書院遺址一、奏復二其旧一、為二学規一、俾守之」 発音〈標ア〉〔0〕

⑨

ないしょうーがん ナイショウ：【内障眼】《名》眼病の一つ。眼球内に故障があって視力が失われるもの。黒内障、白内障、緑内障などがある。そこひ。内障。*慶応再版英和対訳辞書「Cataract 瀑布、内障眼」 発音 ナイショーガン〈標ア〉〔シ〕

⑩

かすみーめ 【翳目】《名》視力が弱まって、物がはっきりと見えない病気。 発音〈標ア〉〔0〕〔三〕〈宗ア〉〔0〕

⑪

すきーみ 【透見・隙見】《名》①物のすきまからのぞき見ること。のぞきみ。*人情本・英対暖語―三・一三章「紅楓（もみぢ）が透見（スキミ）をしては居ぬかと、後へ気がねをするばかりか」*歌舞伎・早苗鳥伊達聞書（実録先代萩）―序幕「垣根の外から塩まぐろの、すきみをして居た所」*二人むく助〈尾崎紅葉〉二「竊と蓋を細目に開けて隙見（スキミ）したまへ」②召使いなどが初めて雇われる場合、主人がひそかに雇人の様子をうかがうこと。*雑俳・末摘花―三「御すき見に琴ハいいゑハころぶなり」 発音〈今まで〉スグミ〔福島〕〈標ア〉〔0〕〈宗ア〉〔0〕

⑦～⑪『日本国語大辞典』（小学館）

№ 1